都城市文化財調査報告書　第99集

池之上城跡

竹之下都城御成図
80.0cm　116.3cm

2010（平成22）年３月
宮崎県都城市教育委員会

序

都城は14世紀後半に築かれ、２回の曲輪の増築、元和元年の廃城、そして昭和初期の鉄道敷設を経て現況を呈しています。

主な発掘調査は昭和57年中之城跡の緊急調査、昭和63年から４ヶ年間の資料館建設に伴う主郭部の調査、平成２年取添城跡の緊急調査、今回報告の池之上城跡、平成10年西城跡の緊急調査があります。

本書は平成５年度国県補助を受け、都城跡の曲輪のひとつであります池之上城跡の現状把握を目的とした確認調査の報告書です。調査からすでに十数年の歳月が過ぎましたが、今回このようなかたちで調査成果を市民の皆様にご報告でき責務の一端を果たすことができたと考えております。また、調査成果が都城跡の整備、考古学や地域史の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査及び報告書作成にあたり、地元の皆様、都城市土地開発公社をはじめとする関係各位、作業に従事された方々に感謝申し上げます。

平成22年３月

都城市教育委員会

教育長　酒　匂　醸　以

例　言

1．本報告書は、都城市教育委員会が平成５年度国県補助を受け実施した発掘調査の一つで、中世山城都城跡の一曲輪池之上城跡の調査報告書である。
2．本書で用いる遺構名及び略記号は、次のとおりである。道路遺構：SF　石積遺構及び石溜まり：SS
3．本書で使用した遺構実測図は調査担当および作業員が行っている。遺物実測図は調査担当のもと整理作業員が以前作成したものと報告書担当のもと整理作業員が平成20・21年度に作成したものがある。
4．本書で使用した図の製図（トレース）は、報告書担当が行った。
5．本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当が、遺物写真撮影は報告書作成担当がそれぞれ行った。
6．本書に掲載した方位はすべて真北である。
7．本書に関する実測図、写真、遺物等は都城市教育委員会事務局文化財課所管の施設に収蔵している。
8．本書の執筆・編集は矢部がおこなった。

本文目次

1．はじめに …… 1
(1)　調査に至る経緯 …… 1
(2)　調査の組織 …… 1
2．遺跡の位置と環境 …… 2
3．調査の記録 …… 3
(1)　調査の概要 …… 3
(2)　遺構について …… 9
(3)　遺物について …… 13
4．小結 …… 30

挿図目次

第１図　調査位置図 …… 2
第２図　調査区域図 …… 3
第３図　遺構配置図 …… 4
第４図　道路遺構と石積遺構 …… 5
第５図　石積遺構１ …… 6
第６図　石溜まり－１ …… 7
第７図　石溜まり－２ …… 8
第８図　銭貨出土状況及び同実測図 …… 9
第９図　土層断面図－１ …… 10
第10図　土層断面図－２ …… 11
第11図　白磁 …… 12
第12図　青磁 …… 13
第13図　青花－１ …… 14
第14図　青花－２ …… 15
第15図　青花－３ …… 16
第16図　舶載陶器－１ …… 17
第17図　舶載陶器－２ …… 18
第18図　舶載陶器－３ …… 19
第19図　備前－１ …… 20
第20図　備前－２ …… 21
第21図　国産陶器・土器 …… 22
第22図　その他の出土遺物 …… 23
第23図　掲載遺物分布図 …… 27～28

表目次

表１　出土遺物観察表① …… 22
表２　出土遺物観察表② …… 24
表３　出土遺物観察表③ …… 25
表４　出土遺物観察表④ …… 26
表５　出土遺物観察表⑤ …… 29

写真図版目次

写真図版１ …… 31
写真図版２ …… 32
写真図版３ …… 33
写真図版４ …… 34
写真図版５ …… 35
写真図版６ …… 36

1．はじめに

(1)　調査に至る経緯

都城の城域はおおよそ27ha、南九州型城郭（群郭式城郭）と呼称され11の独立した曲輪から構成されている。近年城域の南側や取添城跡などは宅地化が進み、昭和49年５月１日付けで主郭部（本丸）のみが都城市の指定文化財となっている。昭和61年モデル木造建築物として歴史資料館建設計画が策定された。４次に亘る調査と並行しながら平成元年には歴史資料館開館に至り、その後資料館周辺の公園整備がおこなわれた。

主郭部のすぐ西隣は西城と呼ばれた曲輪が配置され、現在は狭野神社境内となっている。低地を挟んださらに西に池之上城、中尾之城、長池が位置する。一帯は平成元年から３年にかけ地元から土地区画整理事業が計画された。平成３年文化課（現文化財課）では試掘確認調査をおこなった結果、該地曲輪内の遺構がきわめて良好な状態で保存されていることが判明し、事業予定地である山城と長池の現状を保存するため公有化が計られた。池之上城跡の発掘調査は今後一帯の整備検討が計画される前段として、遺構の保存状態と分布を把握することを目的に実施した。そのため、道路遺構以外は遺構検出面で調査を終了している。調査は平成６年１月25日から同年３月30日にかけて実施した。

(2)　調査の組織

〈発掘作業〉　平成５年度

調査主体	都城市教育委員会	教育長	隈元幸美
		教育次長	村中日出男
事務局	文化課	課長	松山　充
		課長補佐	遠矢昭夫
		文化財係長	海田　茂
	調査担当	主事	横山哲英
	調査協力	主事	桒畑光博

発掘作業員　野口虎男　浜田寛　中原貞良　東千歳　久留保　下田代清海　木下栄子　柳アサ子　阿久根トシエ　時吉ユキエ　瀬戸山久美子　小路スズ子　木村セツ子　中尾ハルエ　米村正子　吉村則子　坂元トミ子　松崎みえ子　宮元孝子　立山君子　藤田フジ子　鴇松雄　福丸貞行　東前利雄　曽原主吉　樋渡正之　平川樹高　和田利雄　重永雄三　荒ヶ田安夫　南スミ子　高橋ヨシ子　蒲生ミツ子　岩切ユキ子　平川美智子　細山田登　大盛祐子　坊地トミ　児玉トシ　茶薗国春　茶薗フミ子　繁昌ミサト　吹上ツユ　福盛ヤエ子　柿木スミ子　柿木チエ子　森山キミエ　南崎ミツ　徳満ヨリ　児玉ワイ　皆吉ハツミ　皆吉昭一郎　堀之内ミツ子　榎木ハナ　福盛信子　福盛春夫　徳満ミツ　井之上クミ　増満順子　広村ミキ　山下フクエ　榎木ツネ　有村ナツエ　榎木ミエ

整理作業員　猪俣幸千代　池谷佳代子

〈報告書作成事業〉　平成21年度

主体	都城市教育委員会	教育長	玉利　譲（～H22. 2. 24）
		教育長	酒匂醸以（H22. 2. 25～）
		教育部長	石川　清
事務局	文化財課	課長	坂元昭夫
		副課長	山下進一郎
	報告書作成担当	主幹	矢部喜多夫

整理作業員　水光弘子　尾曲真貴

2．遺跡の位置と環境

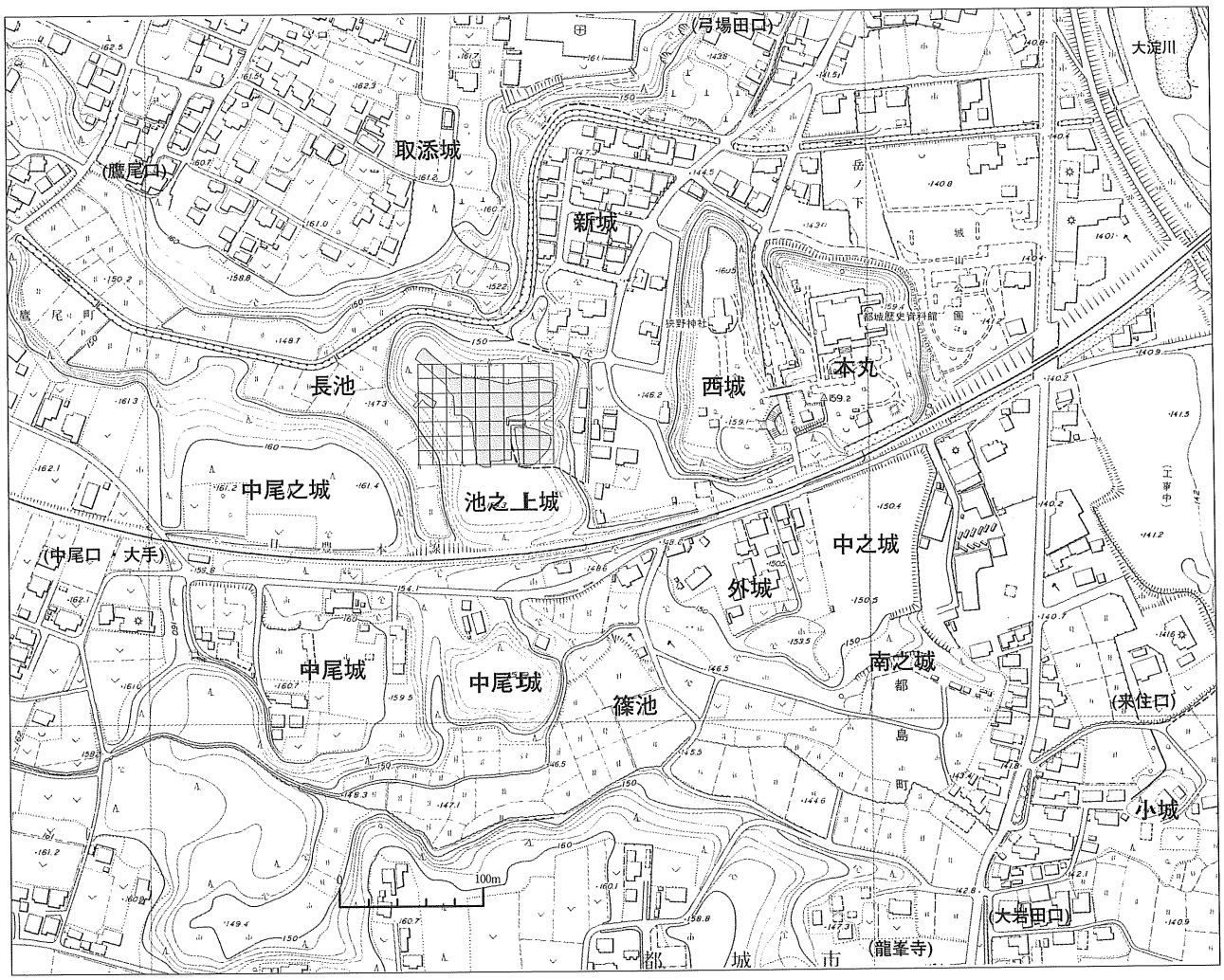
遺跡の所在地は都城市都島町917-1である。都城は大淀川西岸、河岸段丘が入り組む蓑原台地東端に立地する。都城は大小11の曲輪なり、その城域はおおよそ27haと広大で、池之上城は主郭部・西城の西側に位置する。ちなみに、主な曲輪の台地上での現標高を示すと、池之上城跡159～159.5m、主郭部159～159.7m、西城跡158.8～160.5m、中之城跡158.4～159m前後、河岸段丘面は140m前後、大淀川の汀線が138mほどである。

都城については島津資忠が戦功として北郷300町を与えられ、文和元年（1352）北郷薩摩迫に入部し北郷を名乗った、その子義久が都城を居城とした。「都城」の初見は永和二年（1376）のものと思われる書状に「ミやこのしやう」という記述がみられ城館として用いられている。当初の城域は主郭部（本丸）、西城、中之城、外城、南之城の五つの曲輪から成っている。その後、16世紀前半八代忠相が新城、池之上城、中尾之城、中尾城、小城を増築した。取添城は伊集院忠棟のときに設けられたようである。

庄内合戦を経て、元和元年（1615）一国一城令に従い十二代忠能は下長飯村と宮丸村の境（現市役所付近）に館を構えた。その後、城山がどのように土地利用されたかは定かではないが、大正から昭和初期に国分から都城に至る国都線が財部経由となり、西都城・財部間の路線がちょうど都城城域を南北に分断するように敷設され、昭和４年開通し今日に至っている。

都城跡の発掘歴は昭和57年・平成７年中之城跡、昭和63年から平成３年主郭部、平成２年取添城跡、平成10年西城跡、平成19年八幡城跡などがある。

（参考文献）都城市史通史編中世近世
都城市史通史編近現代



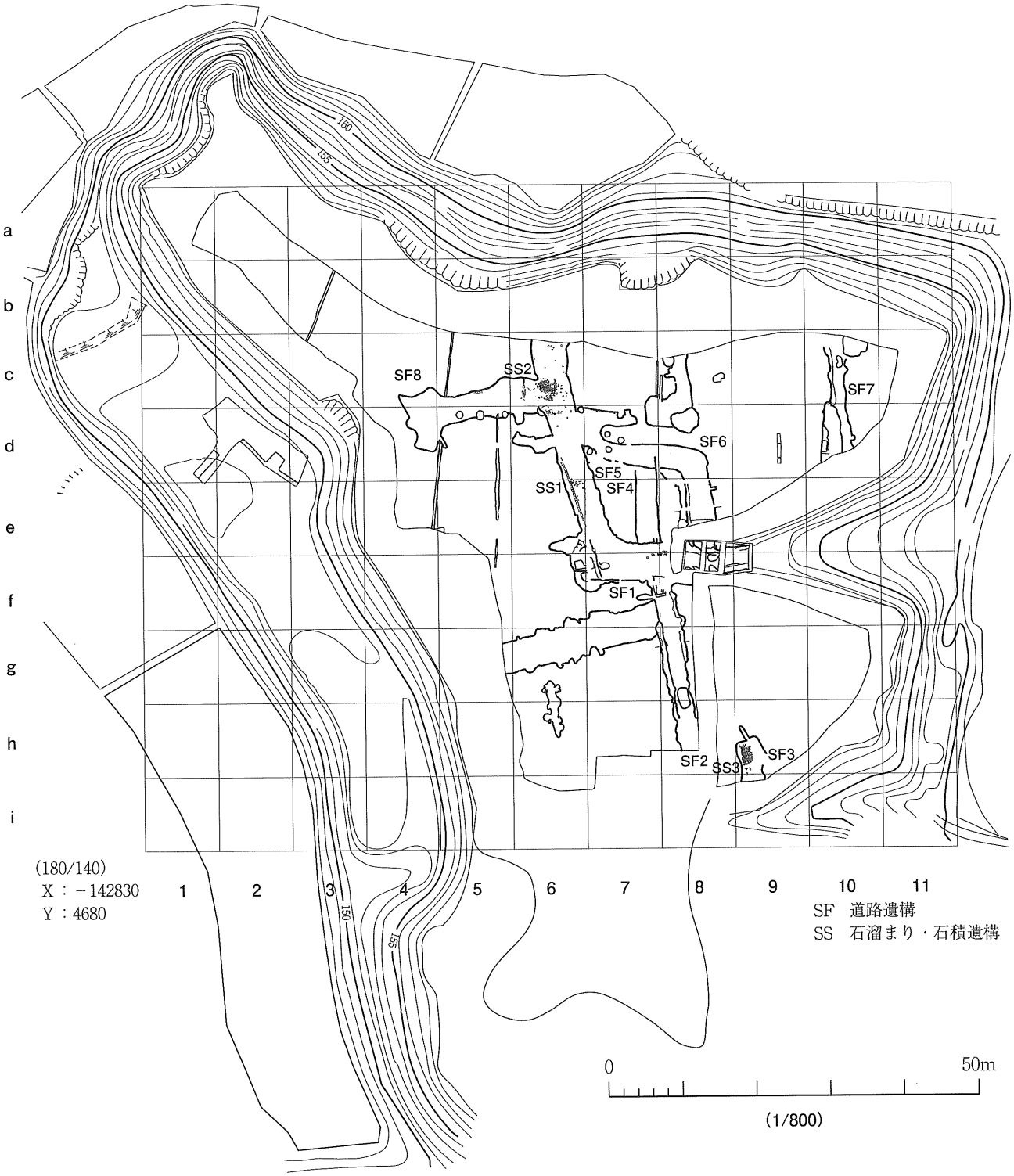
第１図　調査位置図

3．調査の記録

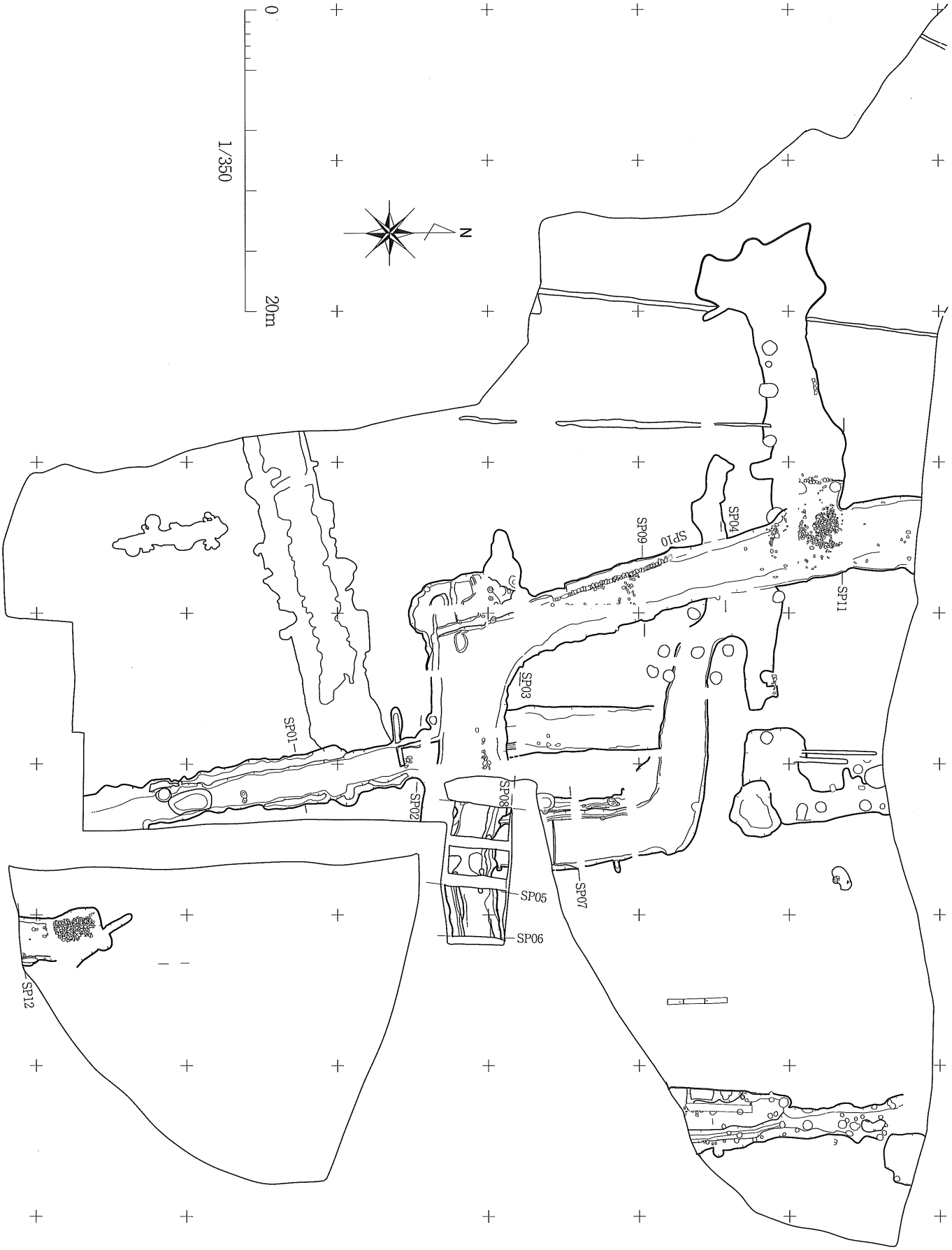
(1) 調査の概要

当発掘調査は公共座標系にグッリド線を一致させている。便宜的に東西方向を西から算用数字（1, 2, 3…）で、南北方向を北からアルファベット（a, b, c…）でグッリドを呼称し、方位は真北を示している。

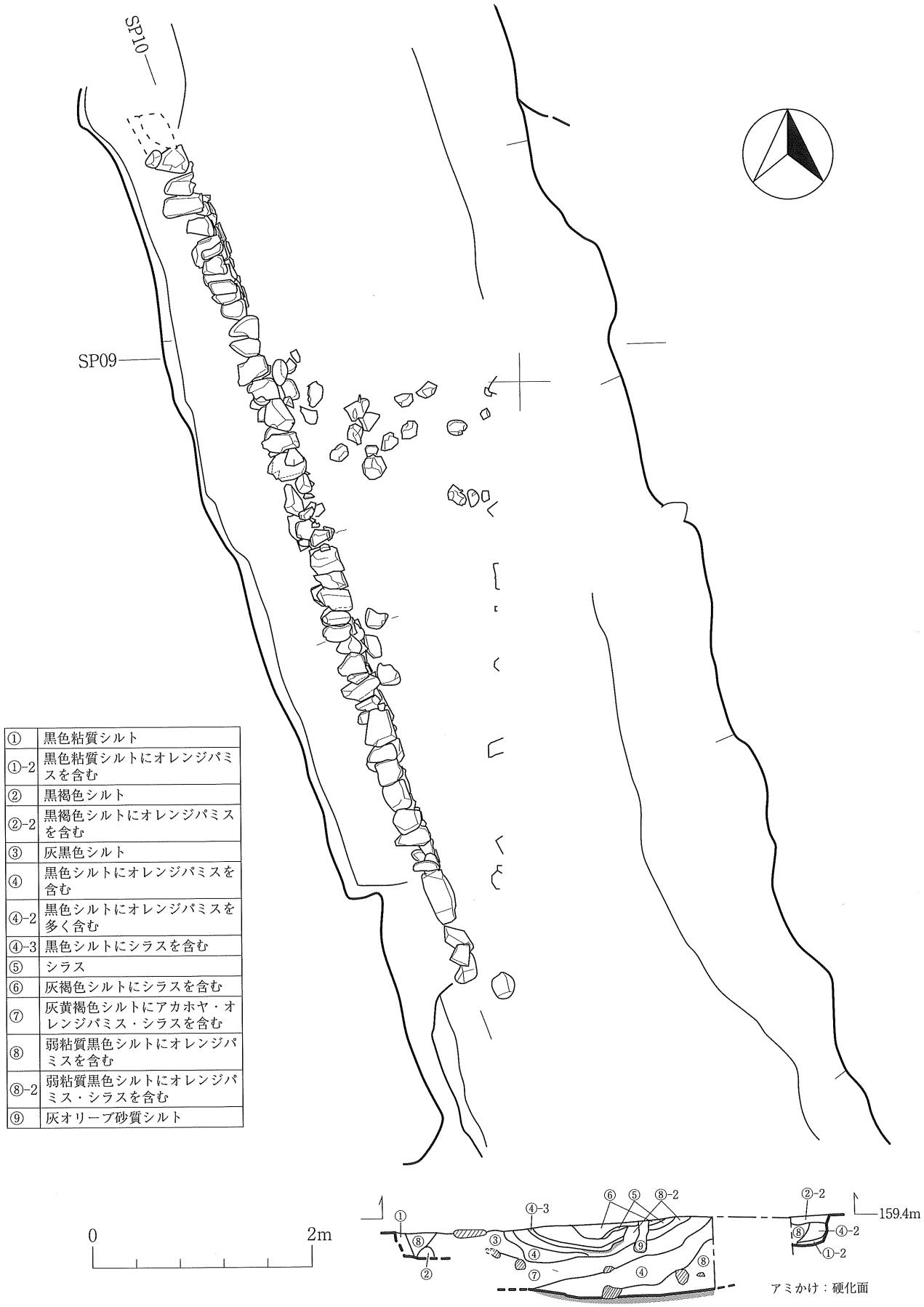
現池之上城跡の裾野部の面積は約14,500㎡、台地上は7,600㎡ほどを占める。調査範囲はおおよそ3,200㎡で、先述したように今回の調査は遺構の保存状況と分布の把握を目的としているため、道路遺構のみを掘下げ、柱穴、土坑や溝状遺構などは検出のみに留めている。なお、道路遺構や石積遺構などについては遺構図を作



第2図 調査区域図

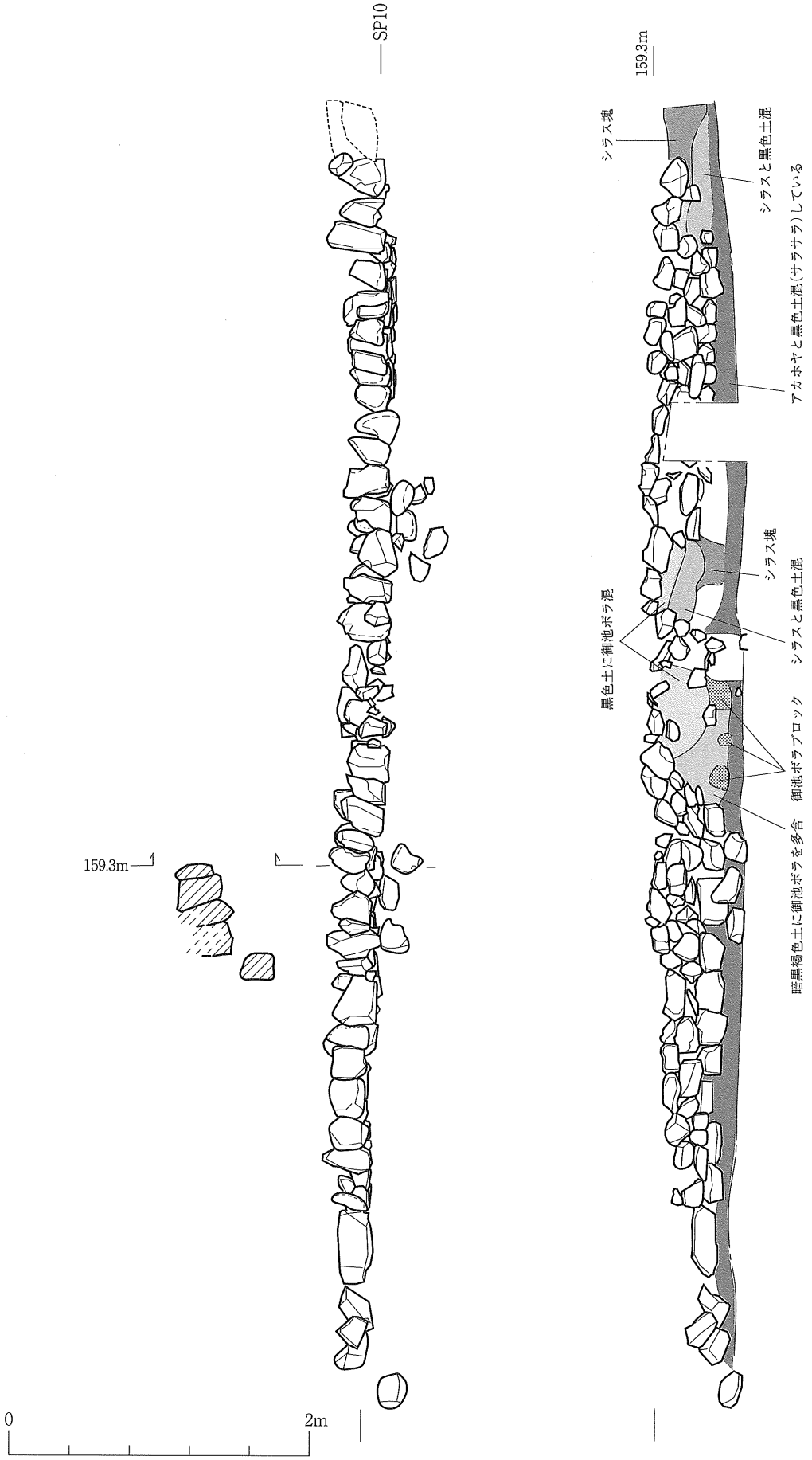

SP11
SP04
SP10
SP09
SP03
SP01
SP02
SP08
SP05
SP06
SP07
SP12
N
0
20m
1/350

第３図　遺構配置図

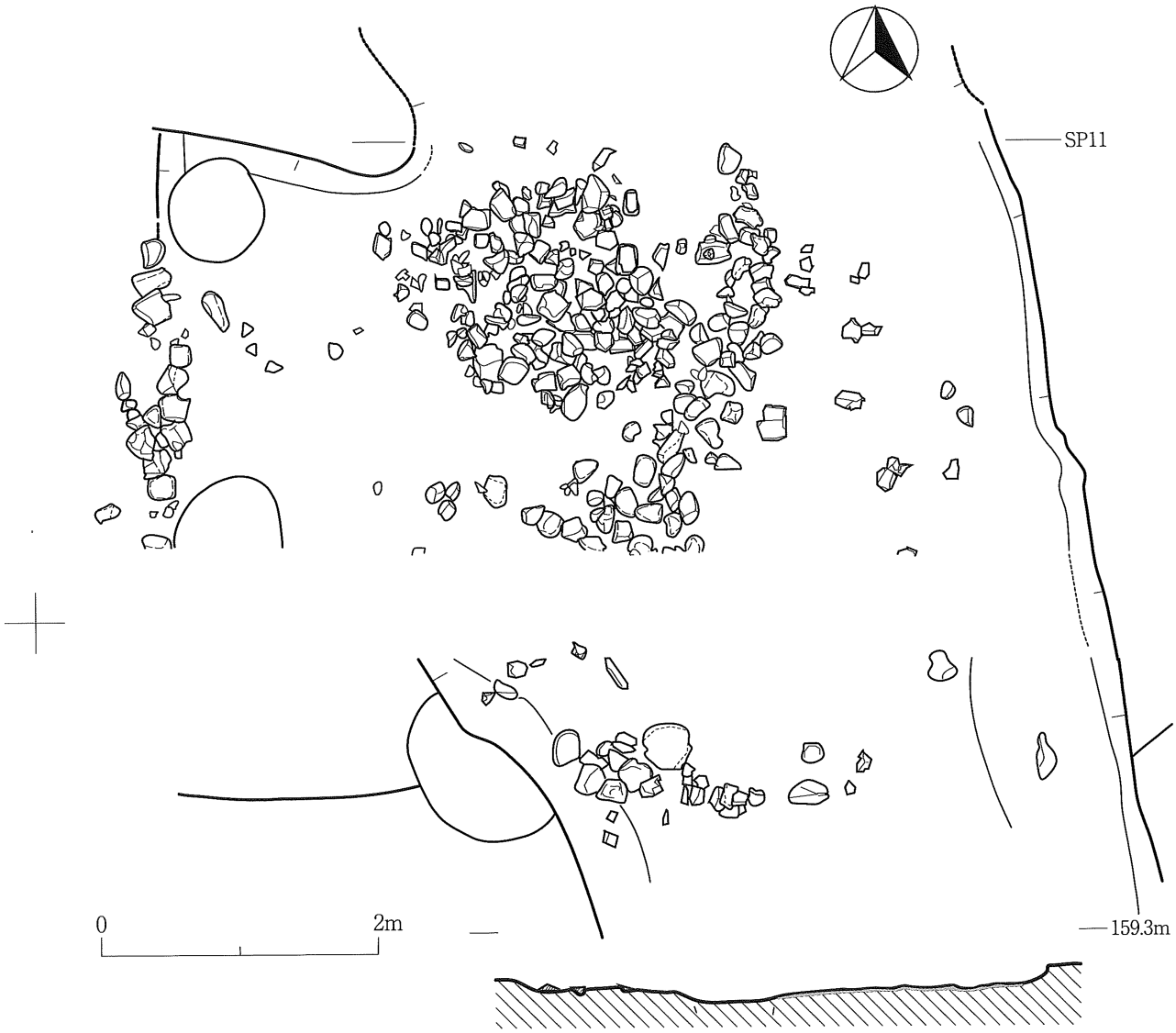


①	黒色粘質シルト
①-2	黒色粘質シルトにオレンジパミスを含む
②	黒褐色シルト
②-2	黒褐色シルトにオレンジパミスを含む
③	灰黒色シルト
④	黒色シルトにオレンジパミスを含む
④-2	黒色シルトにオレンジパミスを多く含む
④-3	黒色シルトにシラスを含む
⑤	シラス
⑥	灰褐色シルトにシラスを含む
⑦	灰黄褐色シルトにアカホヤ・オレンジパミス・シラスを含む
⑧	弱粘質黒色シルトにオレンジパミスを含む
⑧-2	弱粘質黒色シルトにオレンジパミス・シラスを含む
⑨	灰オリーブ砂質シルト

第４図　道路遺構と石積遺構


SP10
159.3m
159.3m
シラス塊
シラスと黒色土混
アカホヤと黒色土混(サラサラ)している
シラス塊
シラスと黒色土混
黒色土に御池ボラ混
御池ボラブロック
暗黒褐色土に御池ボラを多含
0
2m

第5図　石積遺構1

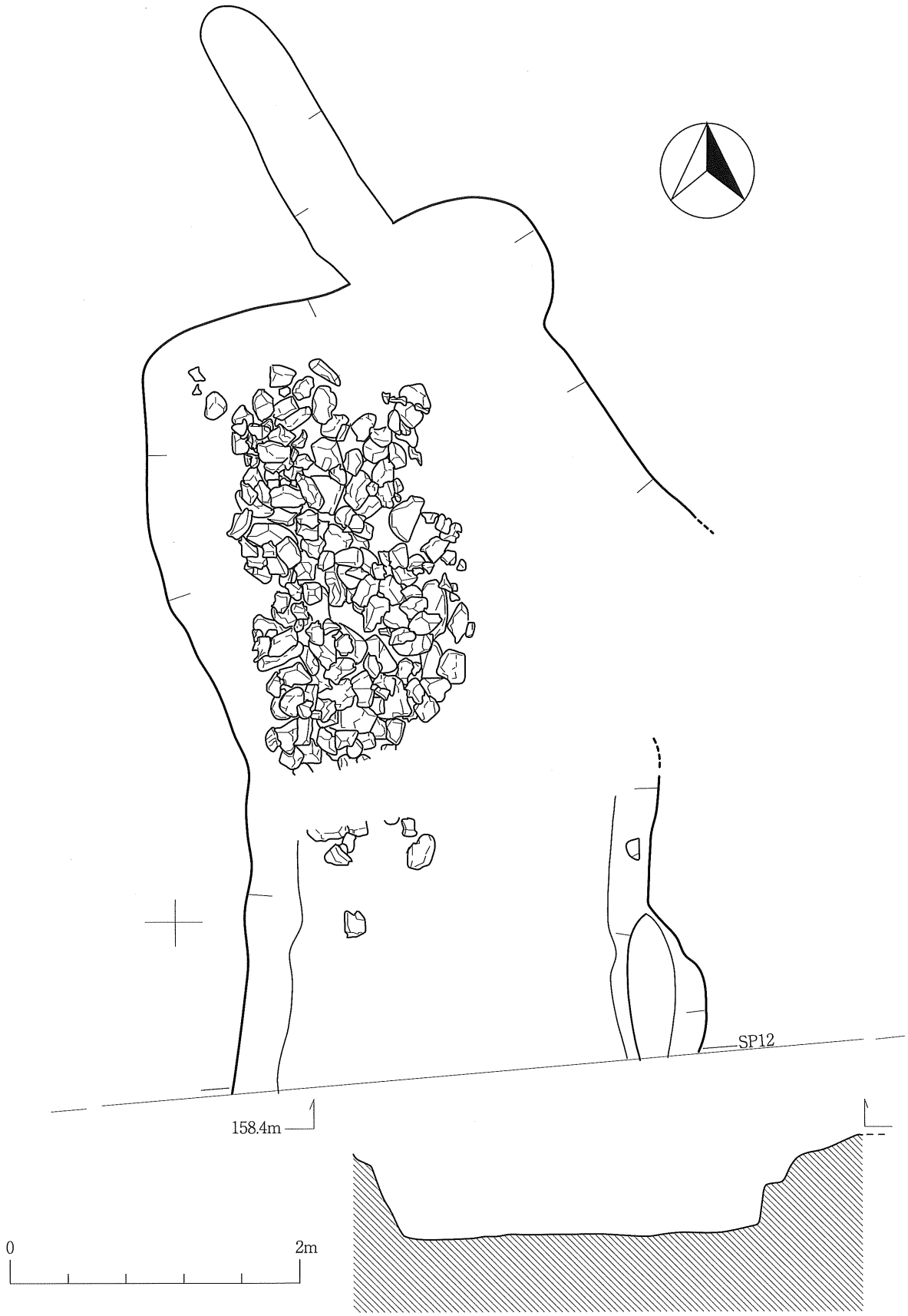


第6図　石溜まり-1

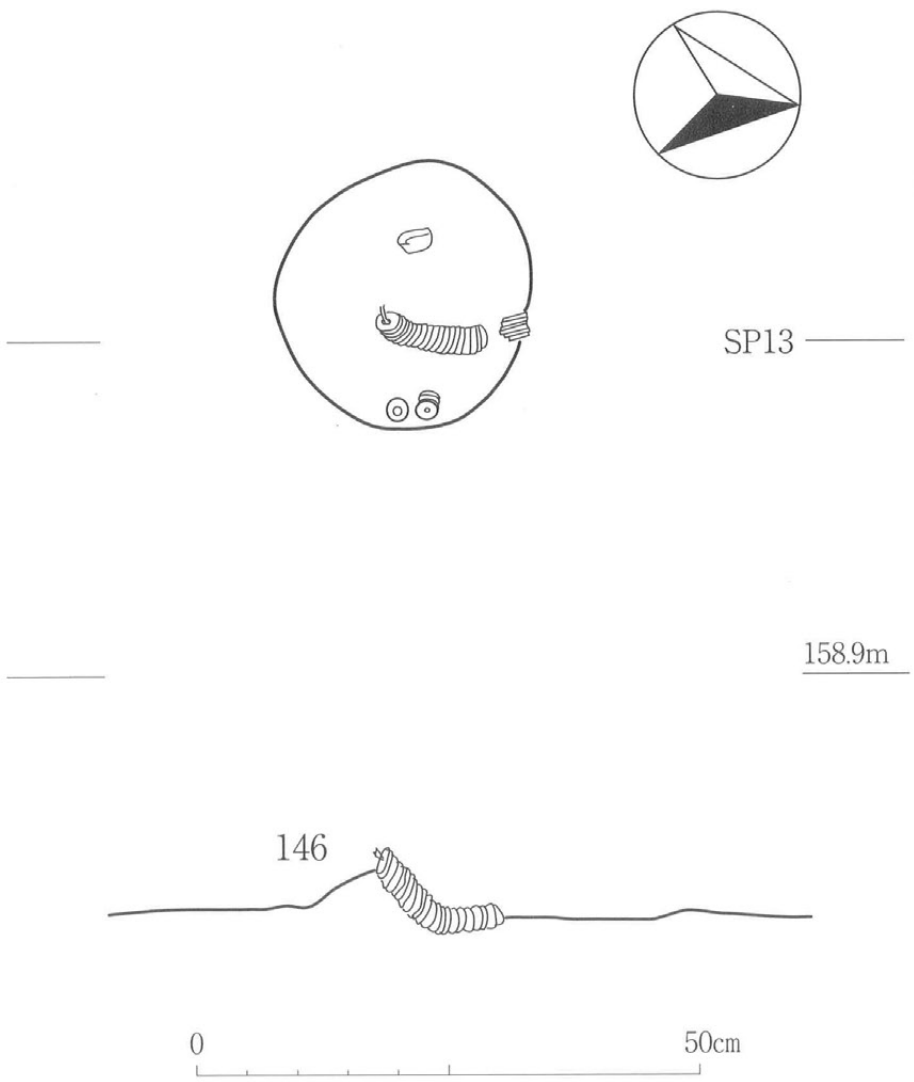
成したが、ほかの遺構については空中写真で概観を示すのみである。

遺跡の基本土層層序はシラス台地上であることから、市内の台地上に立地する遺跡と層序は同一であるが、複数回に及ぶ土地の改変により検出面や遺構埋土は微妙に変化する。中之城跡と主郭部調査の基本層序を各報告書より転記すると、中之城跡では「第Ⅰ層表土（耕作土）褐色をなし軟質である第Ⅱ層黒色土層　厚さ約30cm　第Ⅲ層ボラ層　降下軽石層で遺構のすべてが掘り込まれている　厚さは70cm　第Ⅳ層黒色土層　厚さ約30cm　第Ⅴ層黄褐色土（アカホヤ）層　厚さ約30cm　第Ⅵ層黒褐色土層　厚さ70cm　以下灰褐色土、橙色粘土層、砂礫層の順である。砂礫層は表土より約3.5mのところで確認された。」次に主郭部では「Ⅰ層公園整備による盛土　Ⅱ層灰オリーブ色砂質層　Ⅲ層オリーブ黒色砂質層　Ⅳ層灰白色パミス層（桜島文明降下軽石15世紀後半）　Ⅴ層黒色粘質シルト層　Ⅵ層オレンジパミス層（御池降下軽石）　Ⅳ層は中世の遺構・遺物の年代決定に有効であるが、非常に薄い部分的な堆積である。遺跡全体には認められない。また中世城郭期の遺構は、一般的にⅥ層上面でとらえることができるが、Ⅵ層の残存していないところにおいては、それ以下のアカホヤ層等で確認した。中世の遺物は主としてⅡ、Ⅲ、Ⅴ層に包含されている。」と表記されている。池之上城跡の調査においても御池ボラ層の上層黒色土層中が生活面である。現在の池之上城跡は略五角形状をなし、東面に二つの虎口が確認でき、西面には腰曲輪を備え台地上との比高差は５mほどを測る。

（引用文献）都城市教育委員会『都城・中之城跡』p10　都城市文化財調査報告書　第３集　1983
都城市教育委員会『都之城跡（主郭部）』p12, 13　都城市文化財調査報告書　第13集　1991



第７図　石溜まり－２



第８図　銭貨出土状況および同実測図

(2)　遺構について

平成３年の表面調査（縄張り調査）で東辺側に２箇所の虎口、西辺側と東辺側南位に腰曲輪を配していたことが確認されている。発掘調査は曲輪の北側にやや偏り、遺跡の保存状況と分布を把握する目的で実施されている。道路遺構の一部以外は検出面で調査を終了していることから全容については今後の調査を待ちたい。

道路遺構（SF）都合６条（調査時では８条）を確認した。便宜的に２箇所の虎口の南側を南虎口、北側を北虎口と呼称する。調査区域は北虎口を中心に広がっている。SF１とSF２の切り合いから虎口は南の方が早く造られたことがわかる。

道路遺構１（SF1，SF5）は北虎口から西へまっすぐ12mほど延び、北へ折れそのまま走行する。屈曲部は大きく膨らみ、さらに屋敷地の入り口と思われる突出箇所がある。d・e－６区で石積遺構１、c－６区で石溜まり１を検出している。道路の幅員は４～５m、深度は深いところで0.7m、北側の石溜まり付近では0.15mほどである。また、台地面すぐのSP06・07付近においては、幅員3.3～3.5m、深度1.3mほどの規模である。

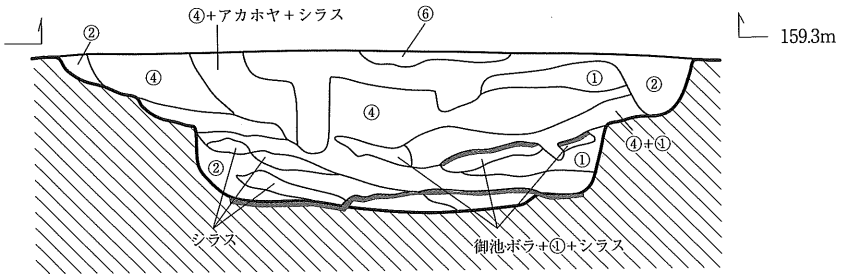
道路遺構２（SF2，SF4）は調査区南端より出現しそのまま北走する。道路遺構１、道路遺構６に切られている。曲輪への進入は南虎口を使用していたと思われる。道路の幅員はSP01で幅員3.4m、最深0.85m、SP04で幅員3.1m、中央付近で深さ0.35mほどを測る。また、SP02検出面で幅員上場3.3m、下場２m、深さ0.9mほどでしっかりとした断面台形状をなし、溝底のみに硬化面をもつことから初期段階に機能していたと思われる。

道路遺構３（SF3）も南虎口からほぼ直角に折れ北進する。石溜まり2が廃棄状況で検出された。幅員はSP12で幅員３m、深さは0.5mほどを測る。

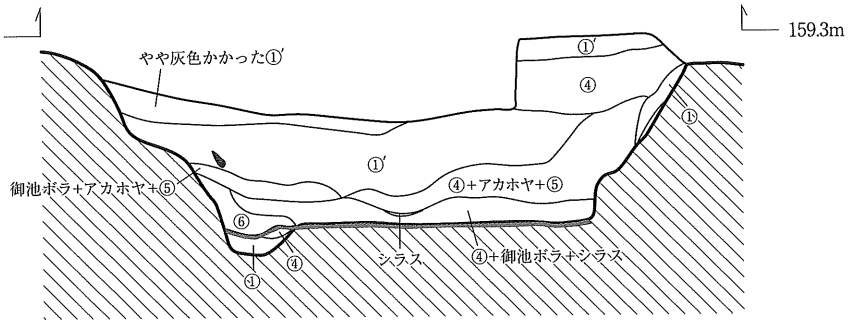
道路遺構６（SF6）は北虎口から北折れ、10mほど進み左にクランクし西走し、d－６・７で分岐する。終点は不定形に拡がり、西側部分は道路遺構１を切っている。終点付近は完掘していない。SP03で幅員は4.6m、深度は0.7mほどである。SP08土層断面図では掘底と中位に硬化面がある。道路遺構６を造成した段階とやや時期をおいて使用したことが窺える。

道路遺構７（SF7）はc・d－10区を南北に走行する。

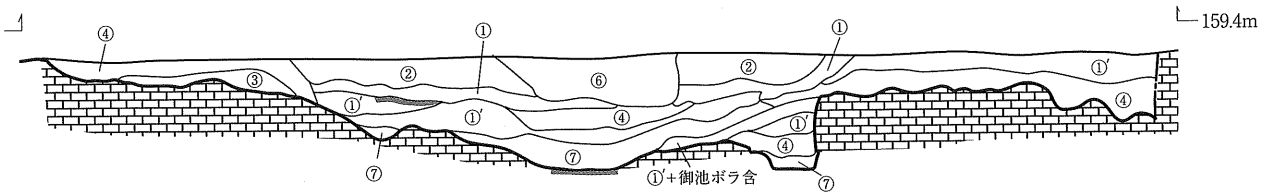
道路遺構８（SF8）はc－６区で道路遺構１から分岐し西走する。検出状態で終了している。



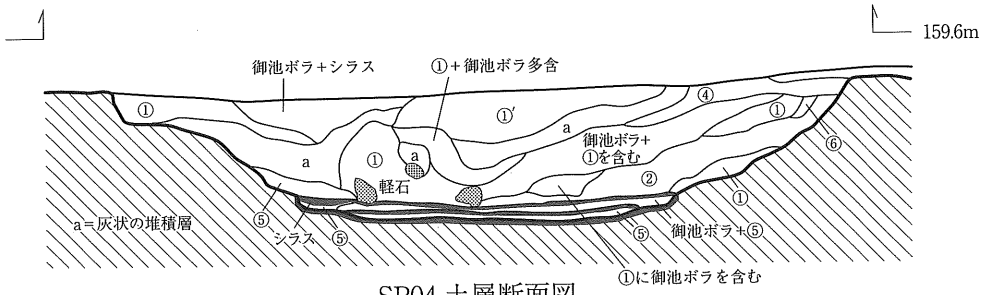
SP01 土層断面図　　アミかけ：硬化面



SP02 土層断面図



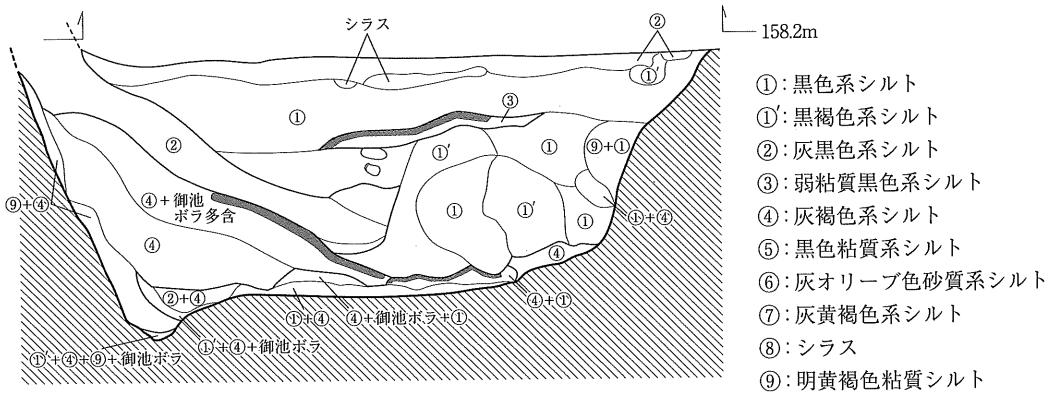
SP03 土層断面図



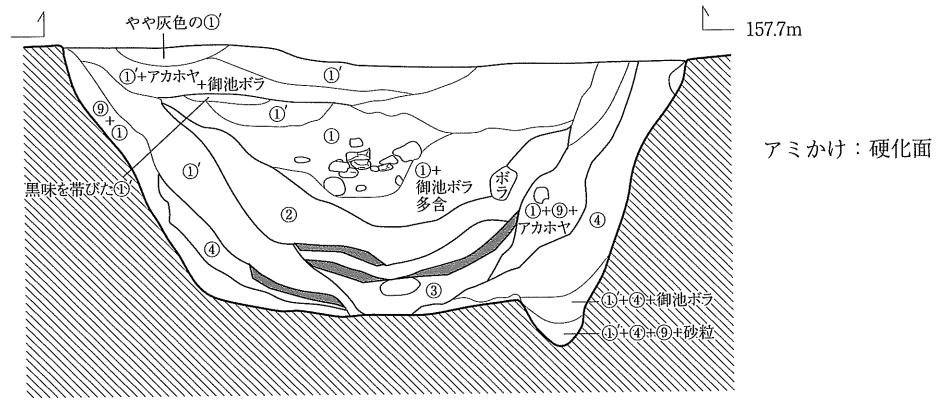
SP04 土層断面図

0　　2m

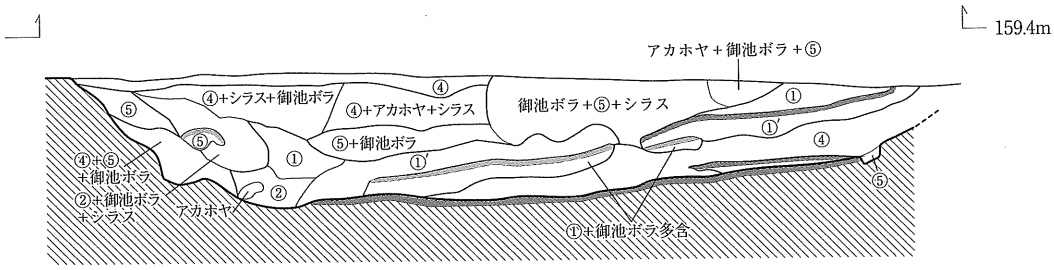
第9図　土層断面図-1



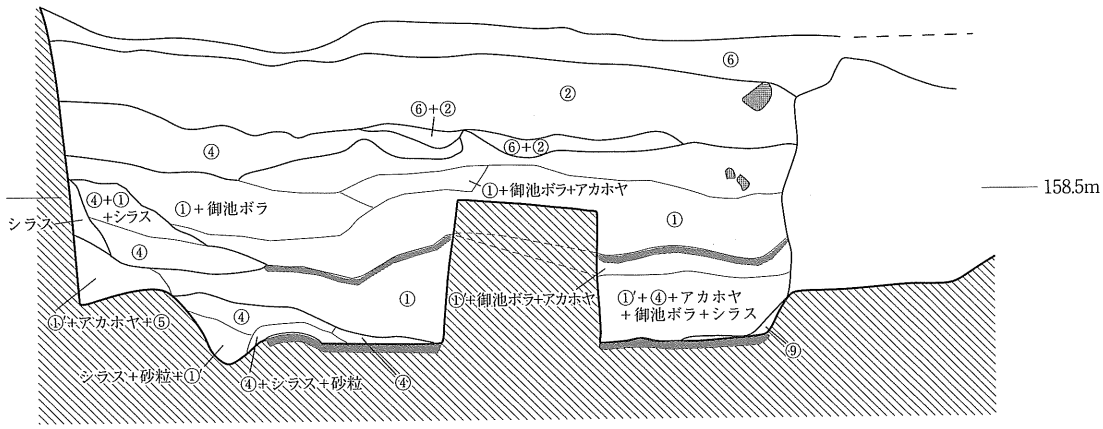
SP05 土層断面図



SP06 土層断面図



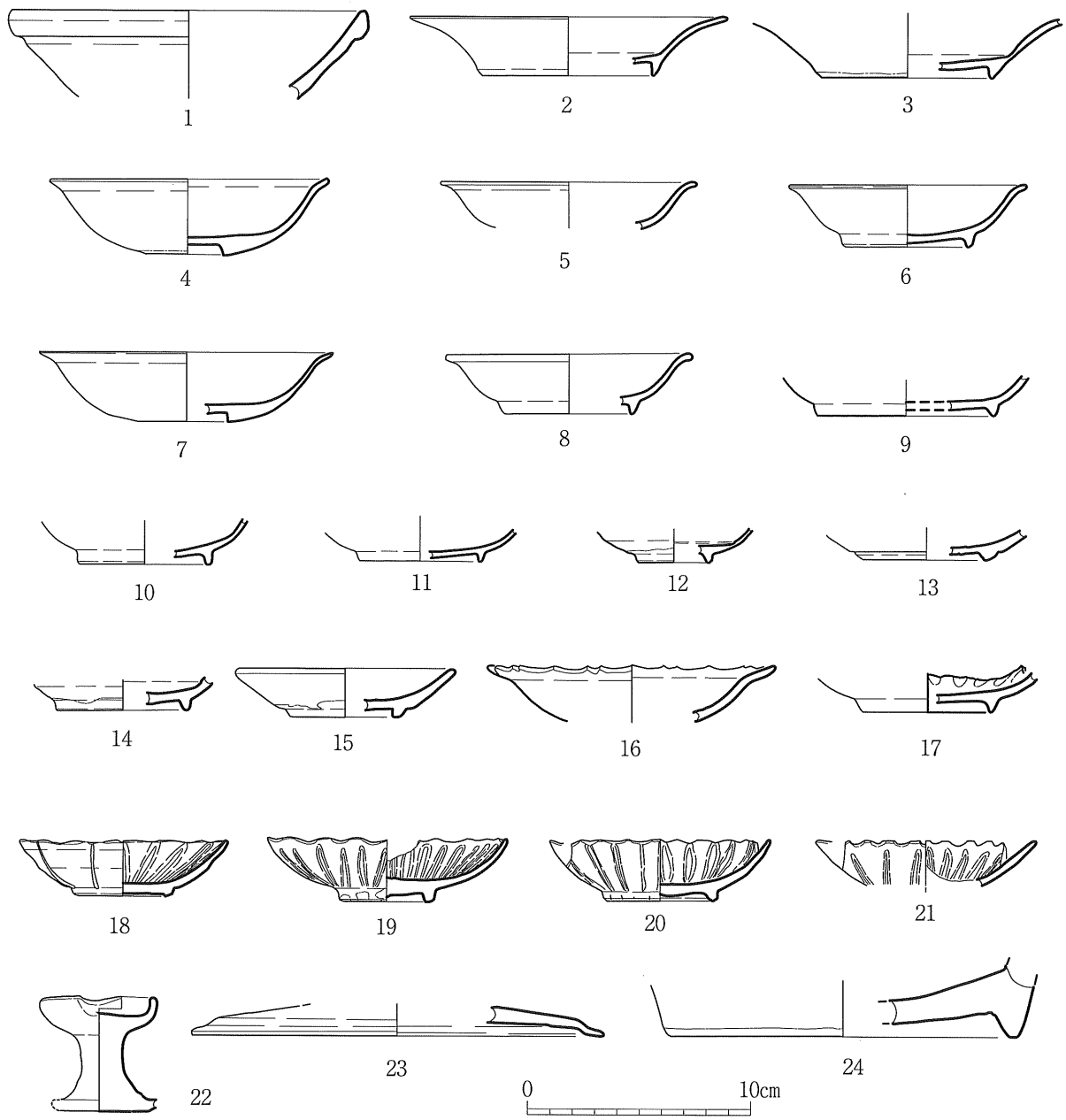
SP07 土層断面図



SP08 土層断面図

0　　2m

第10図　土層断面図－2



第11図　白磁

石組遺構１（SS1）はｄ・ｅ－６区に位置する。道路遺構５の西側端部より0.5mほど中央側に長さ８ｍ、現存１～５段ほどに軽石が積み上げられている。土留め用と思われる。

石溜まり１（SS2）はｃ－６区、SF5とSF8の合流付近に位置する。南北３ｍ、東西６ｍほどの範囲に広がる。土留め用石積の廃棄状態と解している。

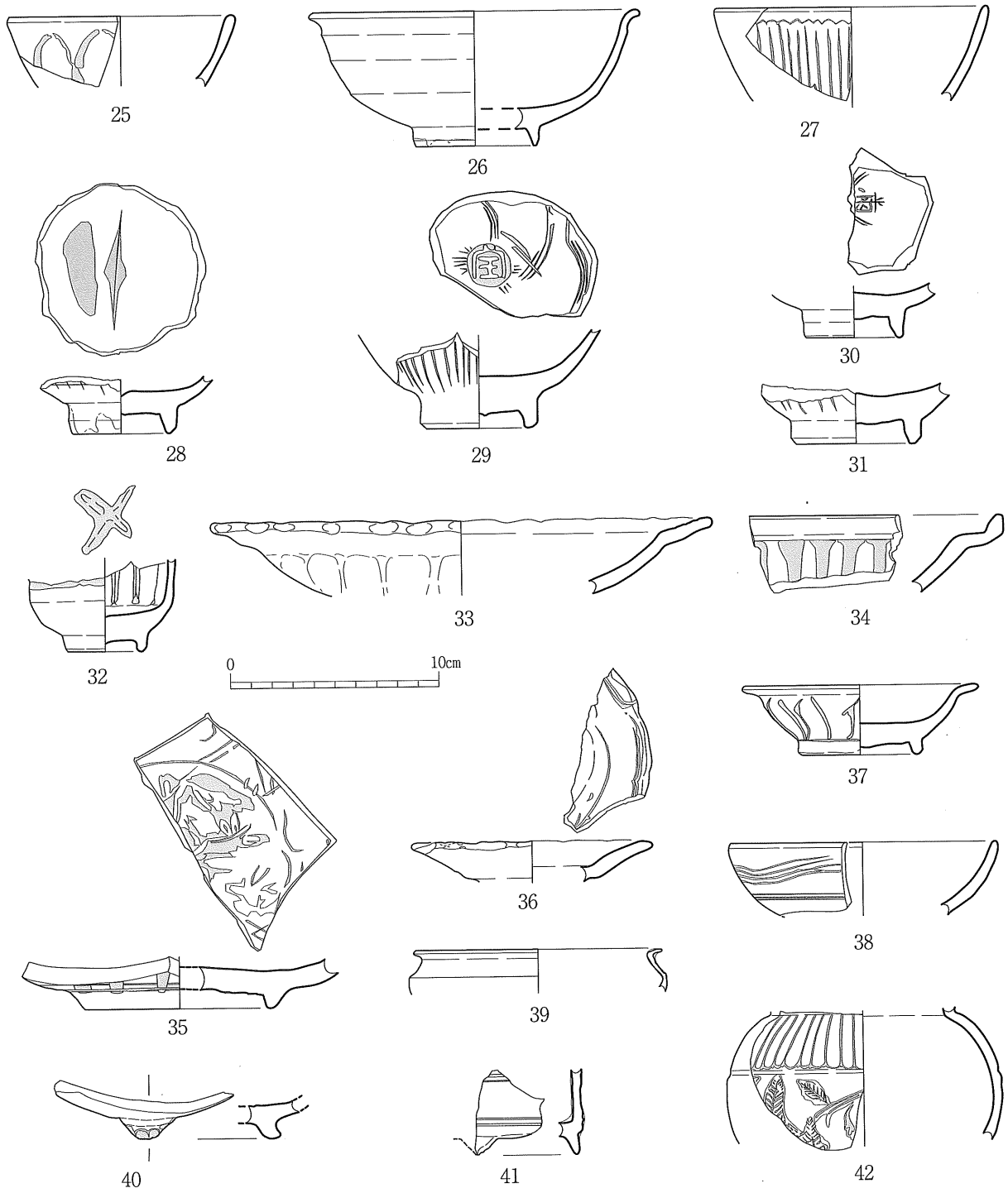
石溜まり２（SS3）はｈ－９区、SF3内に南北2.5m東西1.5mほどに纏まっている。SS2同様石積の廃棄状態である。

緡銭はｈ－９区北側で52枚の銭貨が出土した。このうち緡が残存している銭貨は34枚と７枚塊である。ピット検出面上で確認されていることからピット内に流れ込んだと思われる。

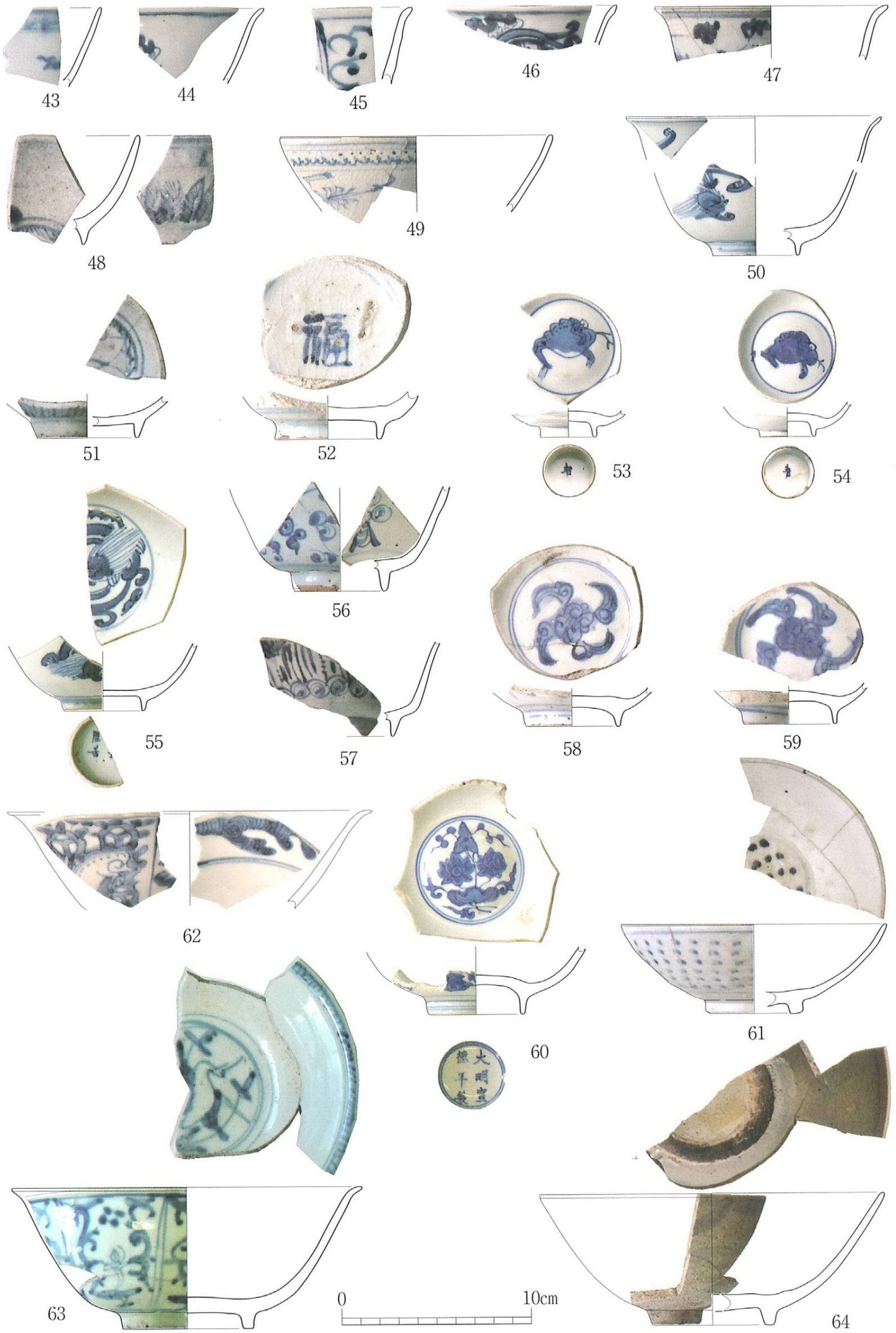
(3) 遺物について

遺物は弥生土器、舶載陶磁器、国内陶器、土師器、銭、瓦などが出土している。破片数としては青花が最も多い。主な遺物の分布については第23図に示した。

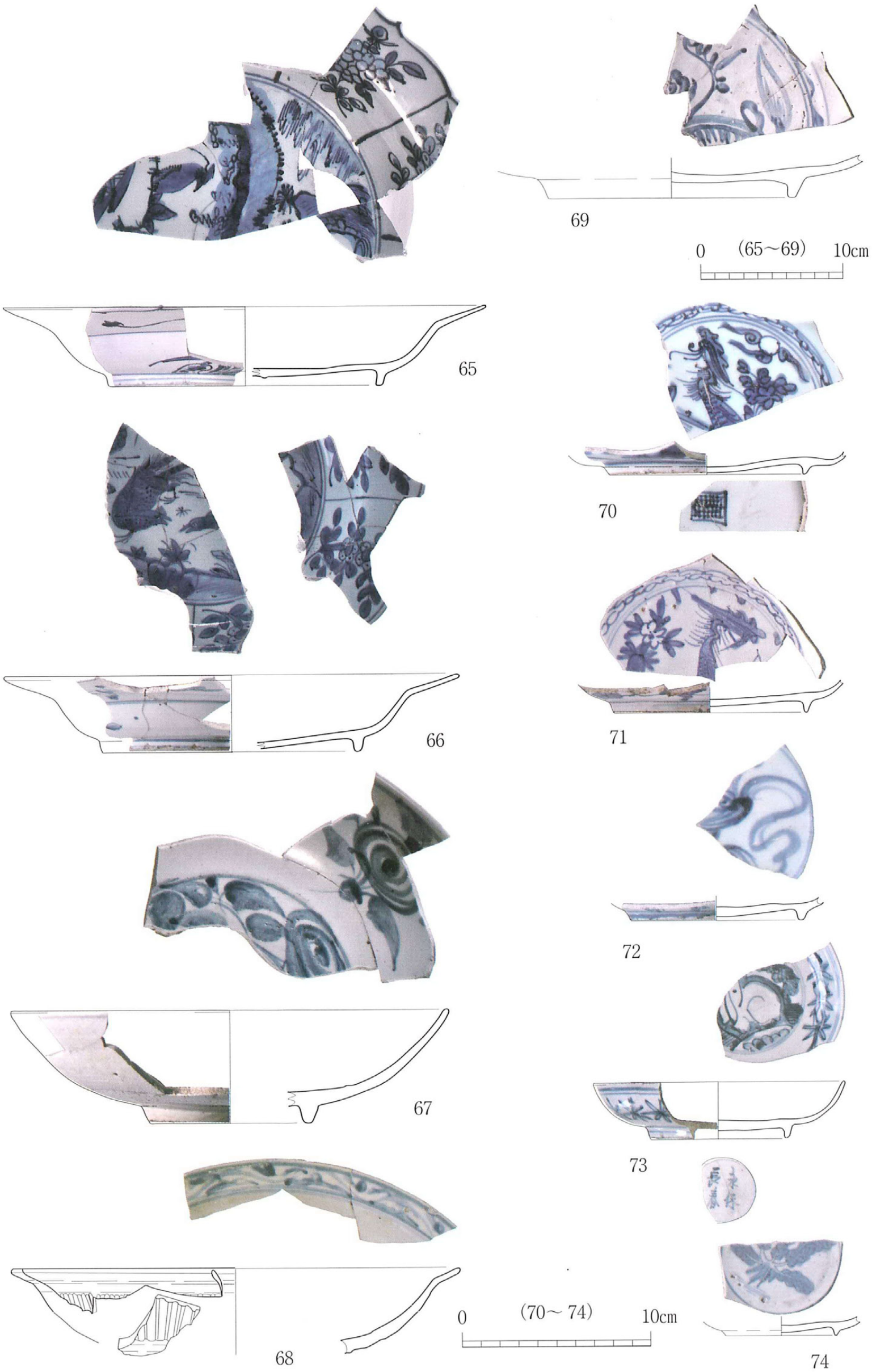
1の玉縁白磁は第2調査区2層より出土で大宰府編年白磁碗Ⅳ類。SF6（d－9区）東では、青花端反碗(44・46・50・55)、白磁端反皿（2・3）、備前すり鉢（128）などが集中している。それぞれ15世紀代、16世紀代、15世紀後半に比定される。



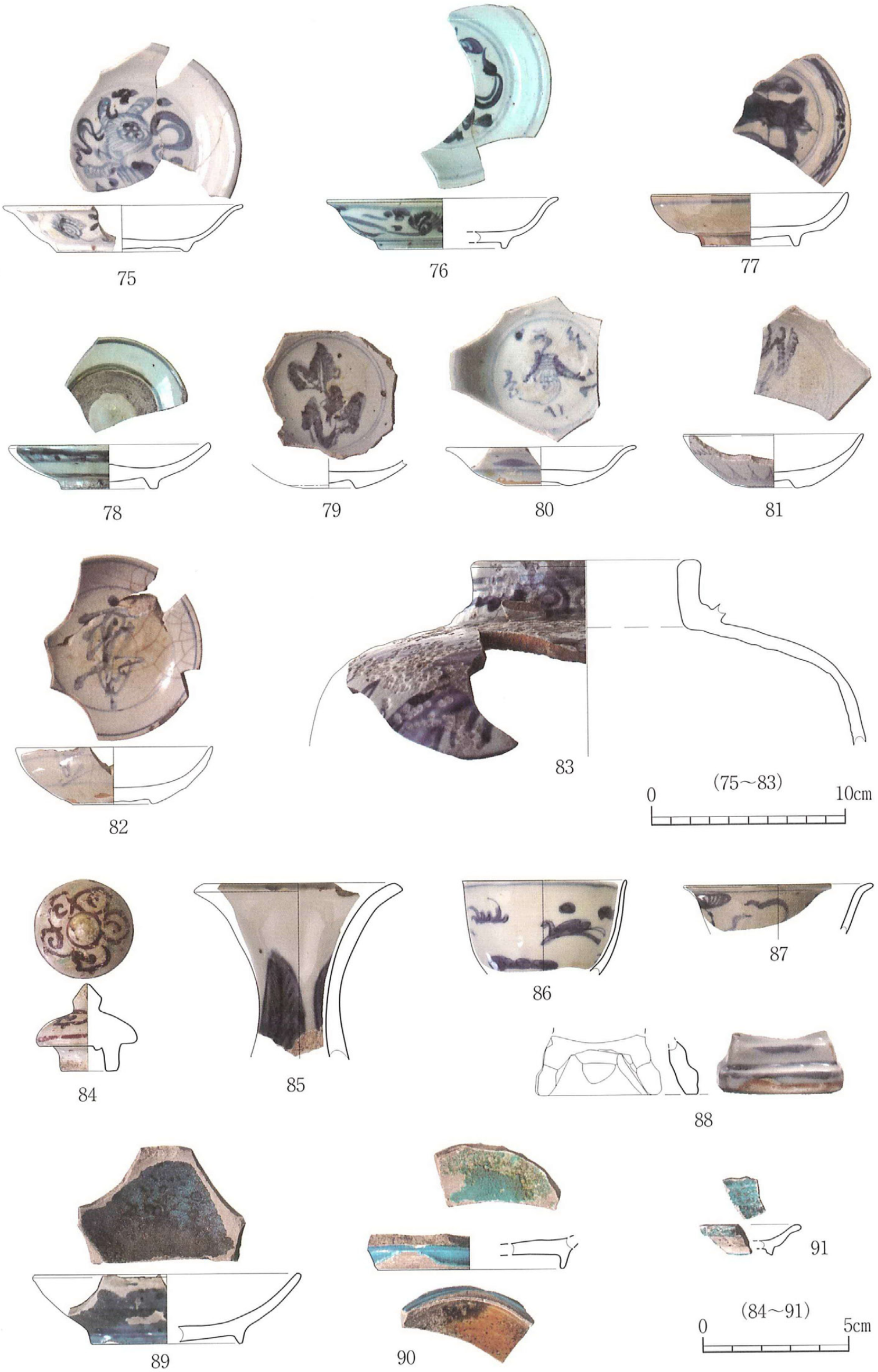
第12図　青磁



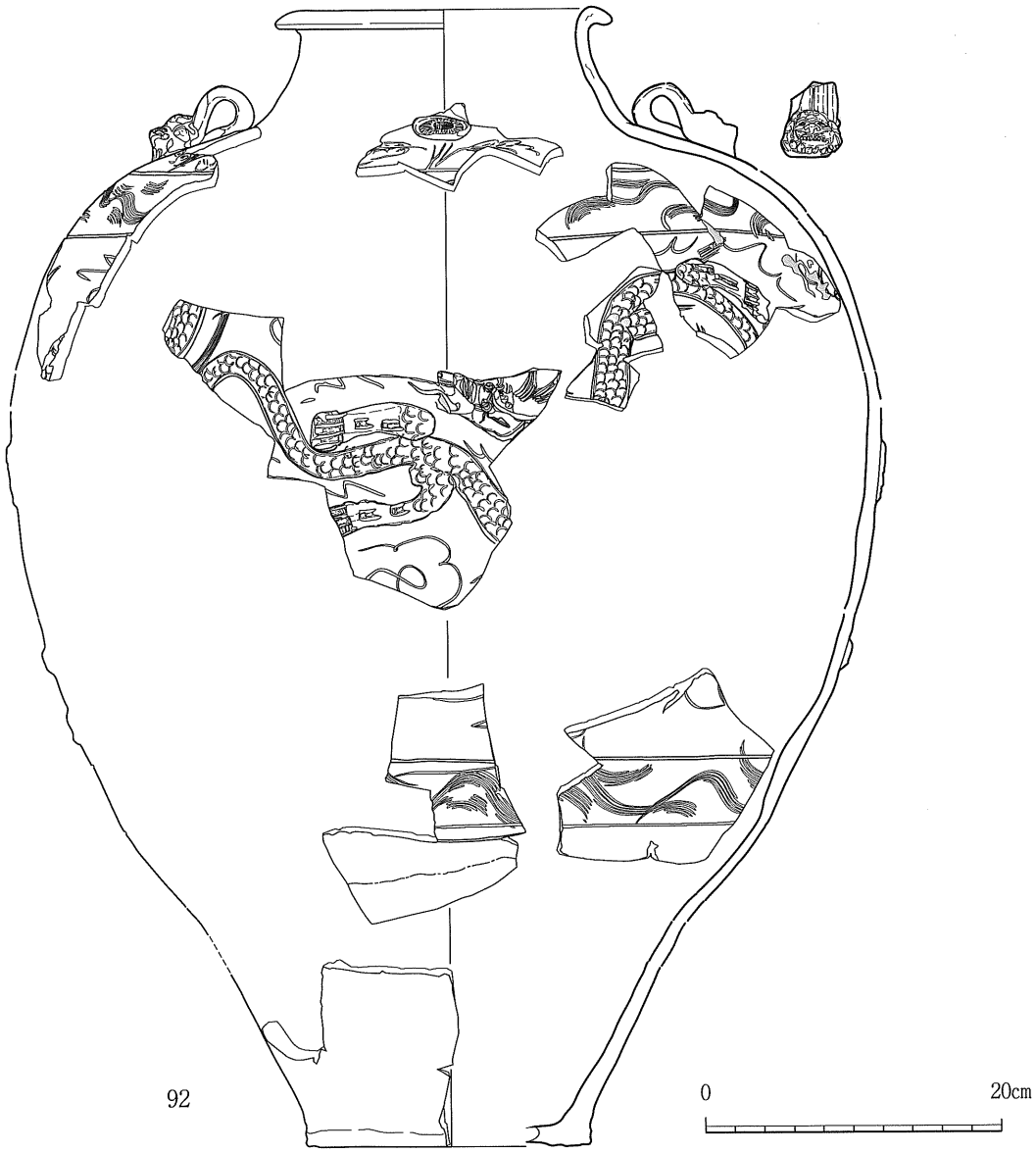
第13図　青花-1

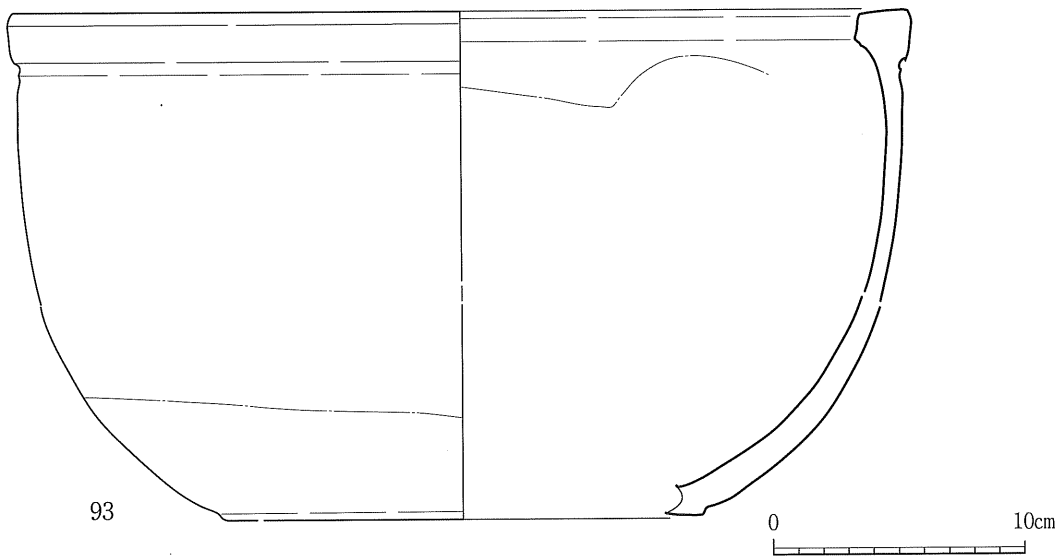


第14図　青花-2

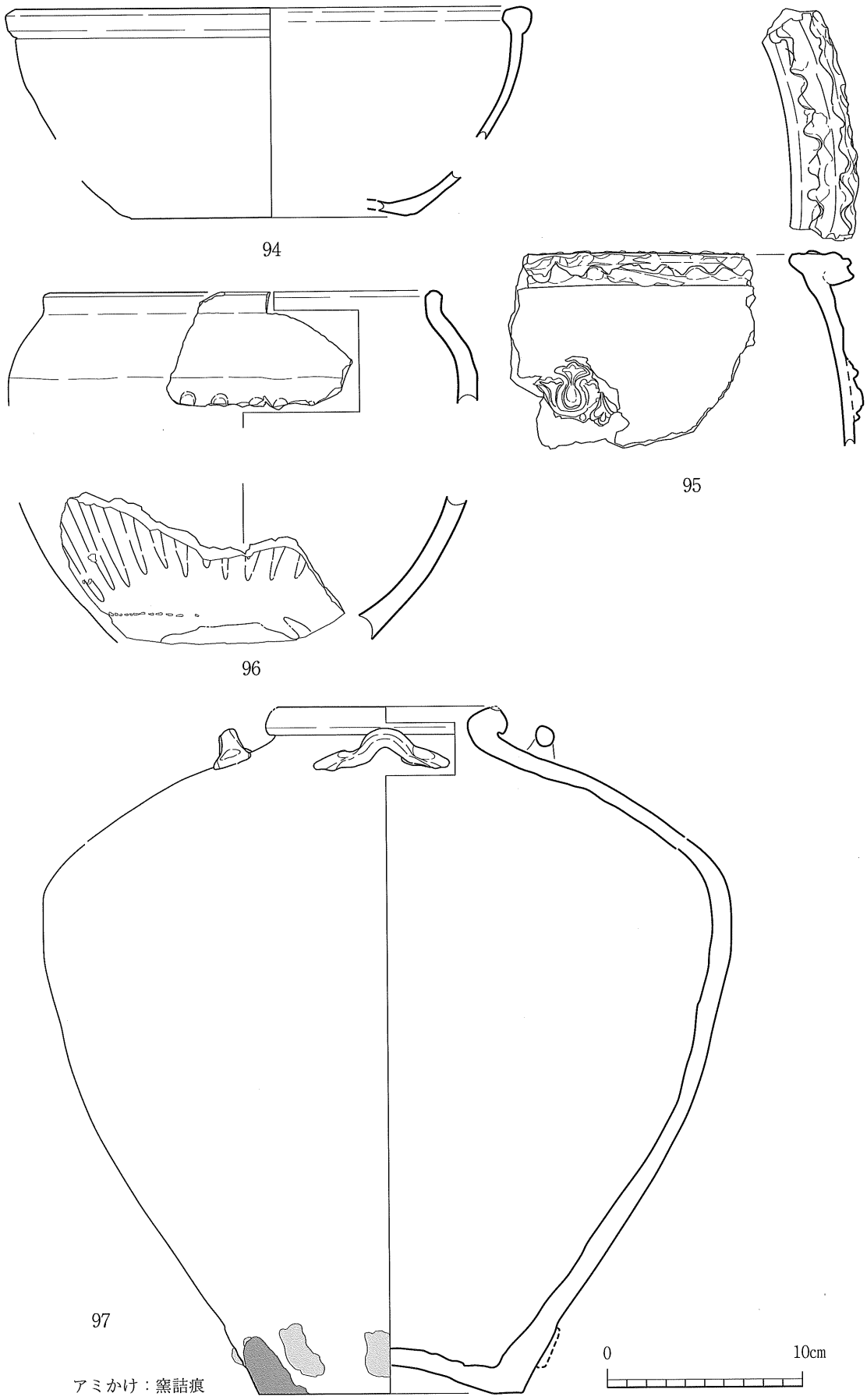

75
76
77
78
79
80
81
82
83
(75～83)
0
10cm
84
85
86
87
88
89
90
91
(84～91)
0
5cm

第15図　青花-3

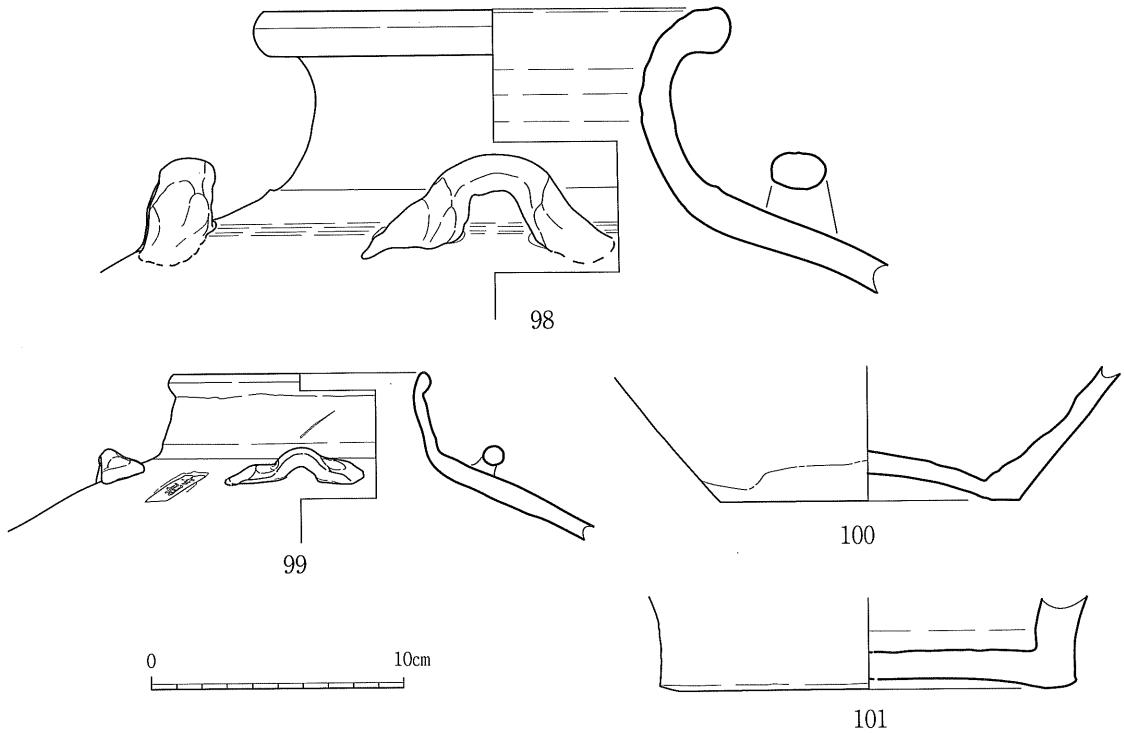




第16図　舶載陶器－1



第17図　舶載陶器－2

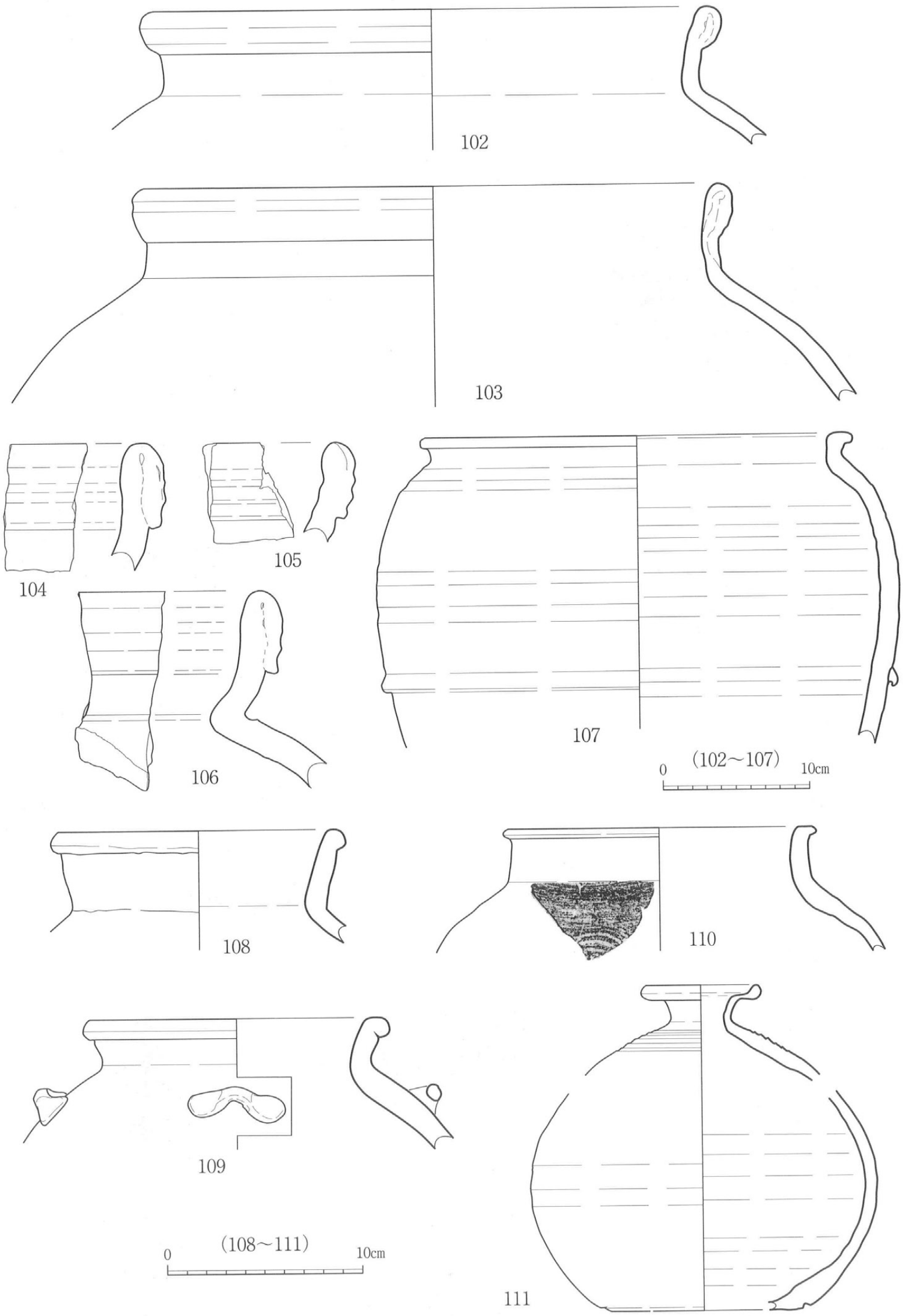


第18図　舶載陶器－3

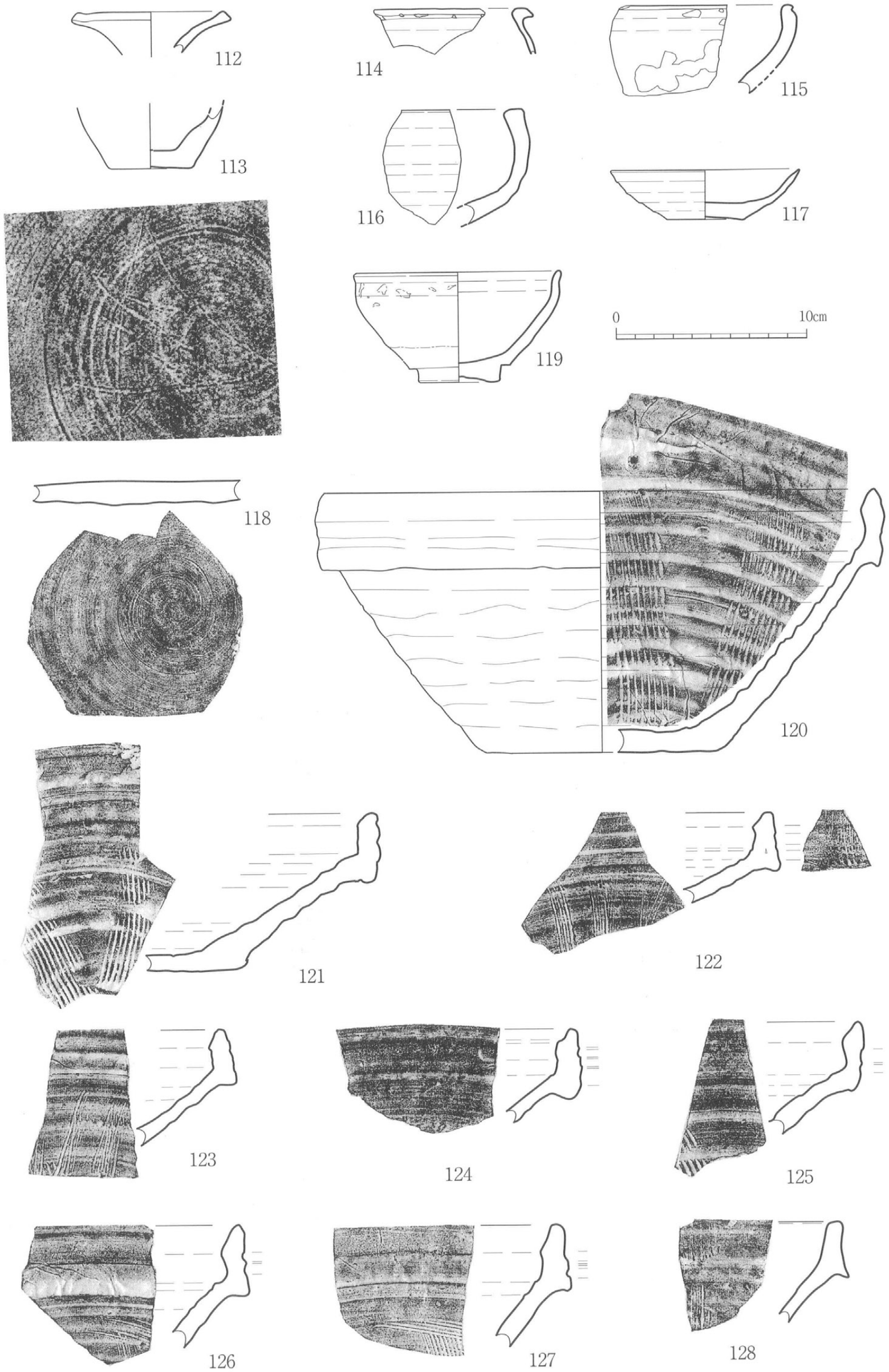
道路遺構をみると、出土数が少ない褐釉陶器はSF1から南に限定される。 鉄釉龍貼付文を施した陶器壺(93) はSF1（e・f7）付近で褐釉陶器（93・94)、白磁（7・16)、青花（52・54・58・63)、備前（106)や土師器小皿（141・142）などと混在して出土している。鉄釉龍貼付は福建窯系で16世紀初頭から中葉、褐釉は16～17世紀、白磁皿は16世紀代、青花碗饅頭心型は16世紀後半、備前大甕は16世紀後半ほどと思われる。また、SF1からは16世紀の青釉陶器片も出土している。次にSF2（f・g8）付近で16世紀後半ほどに比定される褐釉陶器（97）を中心に青花の碁笥底小皿（82)、備前焼（111・117・122・126・138)、瀬戸美濃天目碗（119)、焙烙（135）や見込みに墨書（記号）を施した土師器小皿（144）など一部茶の湯の品々を含み集中している。また、SF2からは瓦質すり鉢（137）や土師器坏（143）もみられる。SF7からは蓮弁に鎬をもたない青磁碗（25)、龍泉窯系青磁盤（34）や漳州産の五彩水注蓋（84）などが出土している。

近世初頭ではSF8とその南SF6（d・6区）に薩摩焼（129～131）がみられる。

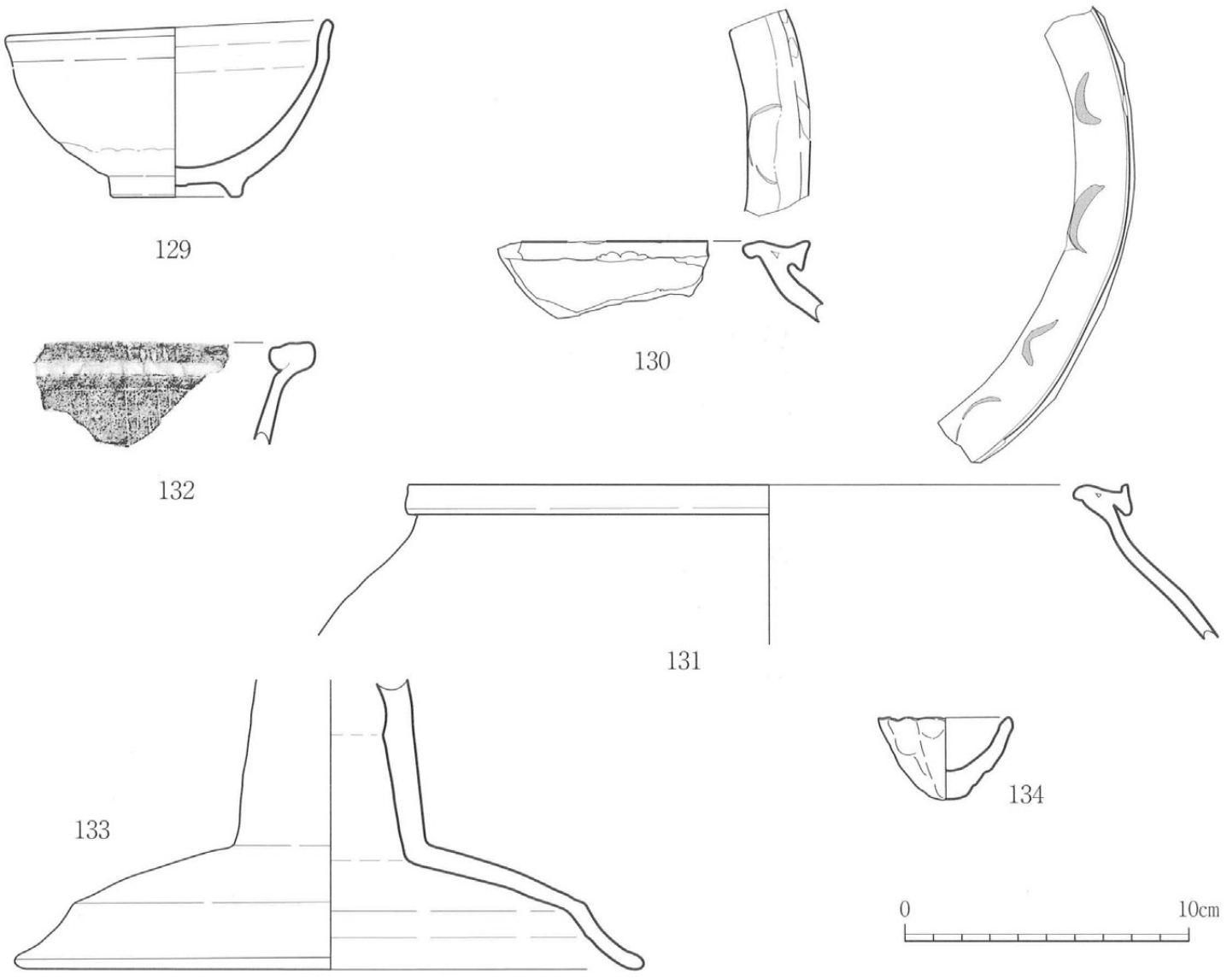
このほか銭貨52枚が第2調査区（h・9）ピット内から出土している。錆化のため定かではないが表に明銭の洪武通宝の銭文したものと背面に「治」を銭出した加治木銭が出土している。


102
103
104
105
106
107
(102～107)
0
10cm
108
110
109
111
(108～111)
0
10cm

第19図　備前-1


112
113
114
115
116
117
119
0
10cm
118
120
121
122
123
124
125
126
127
128

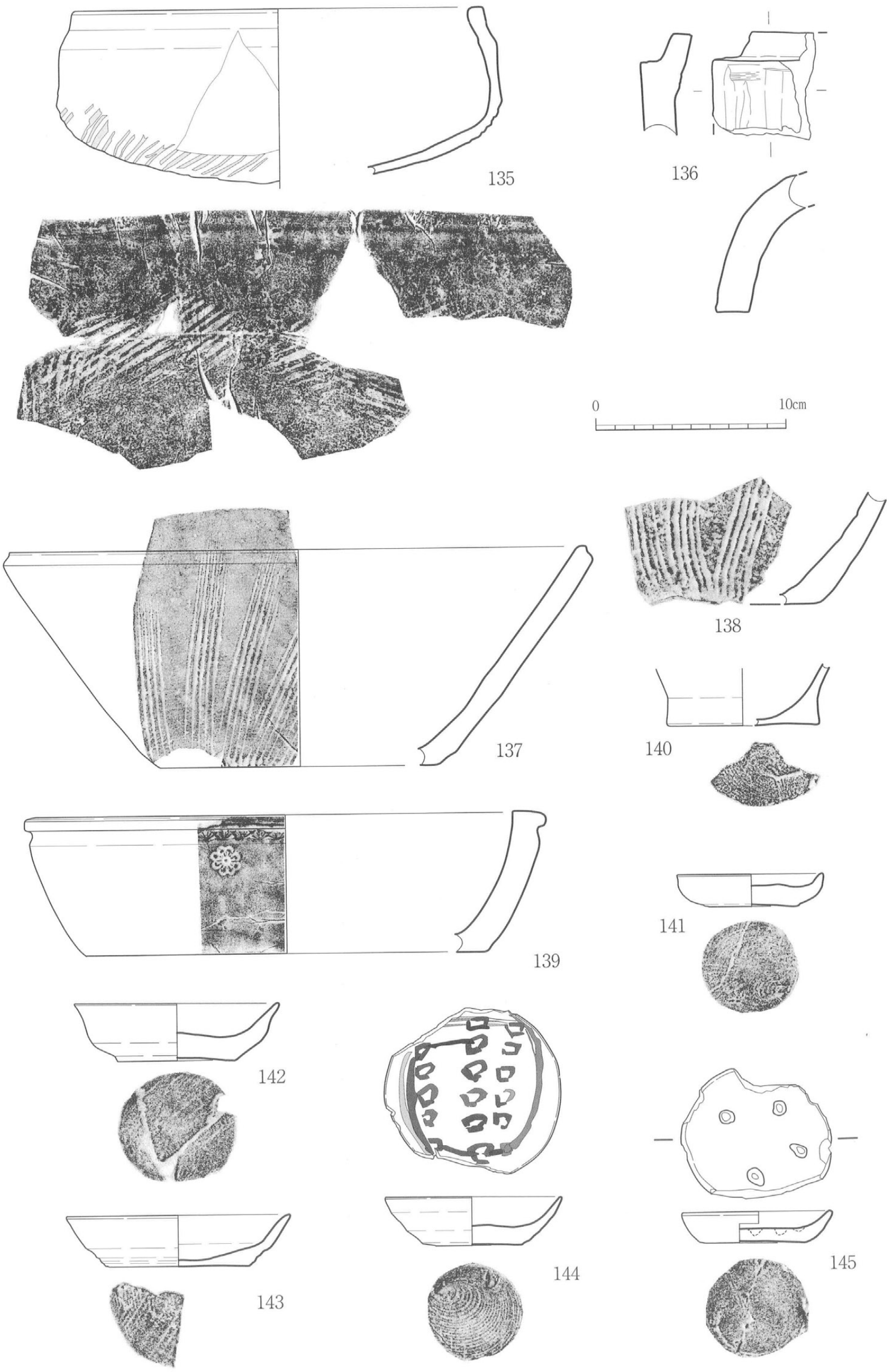
第20図　備前－2



第21図　国産陶器・土器

図版番号	番号	器　種	取上げ番号	グリッド	遺構層位	法量（cm）（反転復元）			備　　考	X座標	Y座標	Z値
						口径	底径	器高				
第11図	1	白磁碗		第2調査区	2層	(15.8)	−	−	玉縁口縁			
	2	白磁皿	1978-1 2001-1	d·9		(16.4)	(9.0)	3.1		230.937 230.863	221.364 223.920	159.294 195.276
	3	白磁皿	1976-1	d·9		−	(8.2)	−		230.351	221.444	159.273
	4	白磁皿	941	f·8	sf1	14.0	3.4	3.6	碁笥底	218.385	210.000	158.452
	5	白磁皿	98	f·8		(12.5)	−	−		210.218	210.152	158.627
	6	白磁皿			sf6	(13.6)	(8.0)	3.0	森田分類E-2b類			
	7	白磁皿	937 1025 2685	f·8 e·7 e·7		(14.0)	(4.0)	3.5	碁笥底	218.125 220.235 220.240	210.000 207.878 205.483	158.452 158.720 158.223
	8	白磁皿			sf6	(12.4)	(7.2)	3.2	森田分類E-2b類			
	9	白磁皿		第2調査区	北西	(11.8)	(6.8)	2.9	森田分類E-2b類			
	10	白磁皿	1982	d·9		(10.2)	(7.3)	2.5	見込蛇ノ目釉剥ぎ体部下半露胎	230.125	222.207	159.251
	11	白磁皿				(10.2)	(5.6)	2.45	福建系 内外体部下半露胎			
	12	白磁皿	1190	h·6		−	(3.6)	−		198.640	198.668	159.271
	13	白磁皿	498	f·7		−	(6.8)	−		217.568	202.356	158.921
	14	白磁皿	876	e·7		−	(5.8)	−	見込蛇ノ目釉剥ぎ	222.919	200.014	159.076
	15	白磁皿			sf1	(11.2)	(6.2)	2.3	内外体部下半露胎			
	16	白磁皿	1674 1693	f·7		(11.2)	−	−	輪花　二次焼成	231.961 219.938	199.611 206.390	158.942 158.622
	17	白磁皿	2776	f·8		−	(5.8)	−	森田分類E-2b類	218.346	219.010	157.576
	18	白磁皿			sf7	(9.3)	(4.5)	2.5	菊皿　高台内無釉			
	19	白磁皿	725	e·7		(10.8)	(4.3)	2.85	菊皿　高台内無釉	222.887	202.918	158.966
	20	白磁皿	4468	c·6		(10.0)	(4.8)	2.75	菊皿　高台内無釉	242.963	196.120	158.919
	21	白磁皿				(10.0)	−	−	菊皿			
	22	白磁　仏飯器	250	f·7		5.2	5.1	−		212.429	208.361	159.301
	23	白磁蓋				(18.6)	−	−				
	24	白磁壺	2168		sf1		(15.8)	−	高台無釉			

表１　出土遺物観察表①



第22図　その他の出土遺物

図版番号	番号	器　種	取上げ番号	グリッド	遺構層位	法量（cm）（反転復元）			備　　考	X座標	Y座標	Z値
						口径	底径	器高				
第12図	25	青磁椀	2169	d·10		(10.8)	−	−	蓮弁文	239.227	234.49	158.935
	26	青磁椀	1683	d·6		(15.6)	(5.8)	6.5	端反り　高台内無釉	239.672	191.168	159.269
	27	青磁椀	2304	d·7	sf6	(13.0)	−	−	剣先蓮弁文	233.259	207.085	159.099
	28	青磁碗	1904	f·8		−	4.6～ 4.7	−	剣先蓮弁文 見込み切り込み状の擦痕	214.347	210.751	158.518
	29	青磁椀	4495	c·6		−	(5.0)	−	見込みに「宝」?の印花 内－ヘラ描文 外－剣先蓮弁文	241.259	193.011	158.9
	30	青磁	724	e·7		−	(4.6)	−		223.036	202.768	159.062
	31	青磁椀	1090	e·8		−	(11.6)	−	見込み－印花 剣先蓮弁文 焼成不良	220.454	210.549	158.467
	32	青磁椀	135	f·8		−	3.6～ 3.8	−	官窯写し　15ｃ	212.288	210.747	158.857
	33	青磁盤	1321 1336 1337	g·7 g·7 g·7	sf5	(24.2)	−	−	口縁稜花	207.519 204.647 204.508	204.171 205.622 205.745	159.288 159.257 159.251
	34	青磁盤	2168	c·10		(29.6)	−	−	龍泉窯系 内面ヘラ彫り	241.095	234.541	159.052
	35	青磁盤	1150	d·7		−	−	9.0		230.982	207.420	159.190
	36	青磁皿	1291 1292	f·6 f·6		(11.6)	−	−	輪花	213.332 213.322	194.894 194.832	159.352 159.352
	37	青磁皿	2601	f·7		(11.4)	(4.35～ 4.45)	5.6	端反り口縁 見込み－印花 外－蓮弁	217.149	200.769	158.881
	38	青磁椀	530	f·7	sf5	(12.8)	−	−	外－ヘラ描文	218.439	201.114	158.973
	39	青磁	2720 2722	f·8 f·8		(12.0)	−	−		219.574 219.875	215.473 215.405	158.514 158.492
	40	青白磁　香炉			sf1	−	−	−				
	41	青磁　香炉	1341	h·7		−	−	−	二次焼成	197.777	209.289	159.134
	42	青磁壺型合子	1376	d·6		−	−	−		237.403	196.849	159.096
第13図	43	青花　碗	1088	e·8	sf1	−	−	−		220.761	210.075	158.545
	44	青花　碗	2037	d·9		−	−	−	端反り口縁	231.150	222.817	159.230
	45	青花　碗	837	e·7	sf5	−	−	−	端反り口縁	225.697	200.843	159.240
	46	青花　碗	4559	e·9		(12.4)	−	−	端反り口縁	229.919	221.252	159.246
	47	青花　碗			sf4	−	−	−	端反り口縁			
	48	青花　碗	499	f·7	sf1	−	−	−	蓮子形碗 芭蕉葉文	217.493	202.153	158.638
	49	青花　碗	4547	c·7		(14.5)	−	−		242.015	204.646	159.233
	50	青花　碗	1975 1976-2 1985	d·9 d·9 d·9	sf1	(11.2)	(4.6)	−	端反り口縁	230.491 230.531 230.335	221.520 221.444 222.594	159.248 159.273 159.245
	51	青花　碗			sf5		(5.4)		蓮子形碗			
	52	青花　碗	1024	e·7	sf1	−	(5.4)	−	端反り口縁 見込み「福」字	220.166	207.682	158.434
	53	青花　碗	2125	d·9		−	(3.0)	−	饅頭心の底部 見込み蛙文	235.170	229.398	159.228
	54	青花　碗	2682	f·7	sf1	−	(3.0)	−	饅頭心の底部 見込み蛙文	219.967	206.153	158.133
	55	青花　碗	1994	d·9		−	(4.2)	−	端反り口縁 見込み玉取獅子文	230.507	223.827	159.218
	56	青花　碗	344	f·7	sf1	−	(4.8)	−	端反り口縁	218.542	208.526	158.139
	57	青花碗	1232	g·6		−	−	−	腰折椀	207.801	198.783	159.247
	58	青花碗	960	e·6	sf1	−	(5.0)	−	饅頭心の底部 見込み如意雲	220.459	205.935	158.674
	59	青花碗	1670	d·6	sf5	−	(5.0)	−	饅頭心の底部 見込み如意雲	231.347	199.350	159.097
	60	青花碗	228	f·7	sf2	−	(5.0)	−	饅頭心の底部 高台内「大明宣徳年製」	212.897	209.671	159.237
	61	青花碗	33	g·7	sf2	(14.2)	(4.8)	5.2		208.818	209.380	159.177
	62	青花小鉢	1071	e·7	sf1	(19.4)	−	−	口縁輪花	220.405	209.419	158.374
	63	青花小鉢	1703	e·7	sf1	(18.5)	(6.9)	7.5	見込み白さぎ	220.642	207.815	158.392
	64	青花小鉢	4478	c·6	sf5	(18.2)	(6.5)	7.0	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	241.781	196.695	158.887

表２　出土遺物観察表②

図版番号	番号	器　種	取上げ番号	グリッド	遺構層位	法量（cm）（反転復元）			備　　考	X座標	Y座標	Z値
						口径	底径	器高				
第14図	65	青花皿	388 396 398 993 1346	f·7 f·7 f·8 e·7 f·6	sf1	(34.0)	(19.0)	5.55	口縁輪花 「つば皿」 小野分類（染付皿F群）	218.160 217.995 218.079 220.428 215.535	209.353 209.424 210.031 206.223 197.476	158.039 158.099 159.162 158.706 159.375
	66	青花皿	824 1080 2665 337 1476 2664	e·7 f·8 e·6 f·7 f·8 e·6	sf5	(32.0)	(18.0)	5.4	口縁輪花 「つば皿」 小野分類（染付皿F群）	225.079 219.874 223.662 218.875 219.984 223.625	200.358 210.013 199.665 207.987 210.452 199.611	159.007 158.713 159.181 158.015 158.674 159.198
	67	青花皿	580 944 2767	e·7 f·7 f·8	sf1	(30.4)	(11.3)	7.95		221.402 218.838 218.000	203.164 209.830 216.298	158.949 157.991 157.827
	68	青花皿	1974 4558 4560	d·9 d·9 d·9		(31.2)	–	–		230.561 230.356 230.403	221.381 221.611 220.984	159.276 159.234 159.254
	69	青花皿	643 1687	f·7 f·7	sf5	–	(17.2)	–		219.952 219.996	202.534 205.730	159.041 158.643
	70	青花皿	414 2275	f·8 d·8	sf1	–	(10.4)	–		217.541 233.654	210.260 212.261	159.085 159.148
	71	青花皿	4583	f·8	sf1	–	(10.2)	–	16c末～17c	217.799	213.298	157.85
	72	青花皿	4461	c·6		–	(9.0)	–	見込み－玉取獅子	248.263	193.812	159.029
	73	青花皿	1808	g·8	sf2	(13.2)	(7.2)	3.0	高台内「永保長春」 小野分類（染付皿E群）	205.118	213.530	159.123
	74	青花皿	1920	f·8	sf2	–	(5.8)	–	見込み野菜文	218.106	210.242	157.917
第15図	75	青花皿	4472 4475	c·6 c·6	sf5	(12.4)	(6.6)	2.4	端反り口縁 見込み玉取り獅子文 高台内砂溶着	242.329 241.620	196.662 196.978	158.902 158.935
	76	青花皿	4477 4480	f·8 f·7	sf1	(12.0)	(6.6)	2.6	端反り口縁 見込み玉取り獅子文 畳付き高台内無釉	219.796 219.882	210.444 203.795	158.618 158.612
	77	青花皿			sf1	(12.0)	(5.0)	2.7				
	78	青花皿	1477	f·8	sf1	(10.4)	(5.0)	2.3	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台砂目積痕有 染付皿C群	219.796	210.444	158.618
	79	青花皿	1734	e·7	sf5	–	(2.8)	–	見込み野菜文 碁笥底 染付皿C群	222.876	201.551	158.854
	80	青花皿	483	f·7	sf1	9.8	2.5	2.0	見込み鳳凰文 碁笥底	217.127	202.075	158.794
	81	青花皿	1168	h·6		–	(2.4)	–	波濤文 芭蕉文 碁笥底 染付皿C群	191.485	195.882	159.118
	82	青花皿	33 59 60	g·7 g·7 g·7	sf2	(10.2)	(4.2)	2.95	見込み「壽」文字 碁笥底 染付皿C群	208.818 209.578 209.641	209.389 209.708 209.721	159.177 159.171 159.141
	83	青花 壺	340 870	f·7 e·7	sf1 sf5	(11.8)	–	–	四耳壺	218.989 222.509	208.362 200.898	158.370 158.955
	84	水注蓋			sf7	1.9	底径3.5	3.0	漳州　五彩			
	85	青花瓶	206	f·8	sf2	(7.1)	–	–		213.878	210.47	159.134
	86	青花小坏	2067-①	c·9		(5.6)	–	–		243.578	222.006	159.323
	87	青花小坏			sf1	(6.4)	–	–				
	88	青花			sf5	–	–	–	器形不明台座？ 畳付無釉			
	89	青釉小皿			sf1	(9.2)	(5.2)	2.4	青釉陶器 二次焼成			
	90	青釉小皿			sf1	–	(6.3)	–	青釉陶器 高台内は透明釉で畳付は釉を掻き取る 二次焼成			
	91	青釉小皿				–	–	–	青釉陶器の型打ちの小皿 二次焼成			

表3　出土遺物観察表③

図版番号	番号	器　種	取上げ番号	グリッド	遺構層位	法量（cm）（反転復元）			備　　考	X座標	Y座標	Z値
						口径	底径	器高				
第16図	92	大壺	別紙			19.6	18.9	77.0	鉄釉龍貼付文 福建窯系　16世紀中			
	93	鉢	1745 1750 1751 1752 553 579 850 938 1001 1672 2609 2732	e·7 e·7 e·7 e·7 f·7 e·7 e·7 f·7 e·7 d·6 e·7 f·8	sf5 sf1	(35.6)	(19.0)	−	褐釉陶器 用途は甕の蓋 内外面とも褐釉を施す 口唇部は釉をふき取る 体部下から底部にかけては露胎 体部下半にススの付着 17世紀　中国	225.623 225.723 225.698 225.766 219.249 221.601 226.020 218.416 220.163 230.978 221.739 218.486	200.500 200.877 200.909 200.908 201.137 202.849 200.599 210.222 206.425 199.702 202.073 212.960	158.961 159.211 159.197 159.186 158.895 158.821 158.740 158.455 158.653 159.004 158.693 158.252
第17図	94	鉢	570-15 1000 1033 1079 1471 1694 2683	e·7 e·7 e·7 e·7 f·7 f·7 e·7	sf1	(26.8)	(14.2)	−	褐釉陶器 内面に掛けた褐釉は口縁内部で収まる 内唇部は無釉 外面は露胎 甕などと合わせ口にして窯詰焼成 16～17世紀 南中国かインドシナ半島	221.736 220.159 220.178 220.059 219.955 219.972 220.454	202.076 206.372 206.466 209.620 206.482 206.276 206.216	159.038 158.635 158.675 158.656 158.640 158.593 158.148
	95	甕	1263 1265	f·6 f·6		−	−	−	褐釉陶器	212.563 212.584	190.094 190.090	159.328 159.347
	96	甕	2728 4438 4440	f·7 h·9 h·9	北虎口 sf3 sf3	(19.6)	−	−	褐釉陶器	218.054 193.628 193.603	212.904 220.506 220.979	158.224 158.373 158.225
	97	四耳壺	42 44 1833 2 12 15 48 54 109	g·7 g·7 g·8 g·7 g·7 g·7 g·7 g·7 f·8	sf2	(11.2)	13.5	−	褐釉陶器 底部上げ底 胴最下部窯詰痕 口縁最上部欠損	208.211 208.131 207.688 208.150 208.721 208.979 208.095 208.372 211.856	209.356 209.590 211.778 208.917 208.651 208.651 209.423 209.077 210.011	159.195 159.216 159.123 159.165 159.175 159.189 159.157 159.132 158.908
第18図	98	四耳壺	914	e·6	sf5	(18.2)	−	−	褐釉陶器 東南アジア（タイ）産 16c代	226.156	199.043	158.781
	99	四耳壺	4576	h·6	第3層	(10.0)	−	−	褐釉陶器　茶壷 耳の間に「清」の刻印 二次焼成あり	197.561	191.933	159.264
	100	壺	65	g·8	sf2	−	(11.4)	−	褐釉陶器 99の底部と思われる	208.316	211.133	158.594
	101	壺			sf7 sf2	−	(15.0)	−	褐釉陶器			
第19図	102	甕	1479 2421	f·7 e·7	sf1 sf5	(40.0)	−	−	備前 ⅣB期　16世紀前半	219.935 225.279	203.774 200.402	158.585 158.762
	103	甕	755 913 2790	e·7 e·6 e·6	sf5	(41.0)	−	−	備前 ⅣB期	223.707 228.335 229.376	200.850 198.388 198.940	159.203 158.735 158.906
	104	甕	2751	f·8	sf1	−	−	−	備前Ⅴ期	217.673	214.353	158.041
	105	甕	4515 4516	e·6 d·6		−	−	−	備前Ⅴ期 1575～1600	229.881 230.092	198.415 197.831	159.023 159.009
	106	甕	338 697 963 1002	f·7 e·7 e·7 e·7		−	−	−	備前Ⅴ期	218.906 220.767 220.669 220.022	208.080 202.376 205.798 206.296	158.182 158.538 158.953 158.902
	107	甕	496 502 631	f·7 f·7 f·7	sf1	(29.6)	−	−	備前Ⅳ期	217.428 217.840 219.235	202.951 202.606 201.940	158.830 158.768 158.712
	108	壺	905 1534	f·7 d·6	sf5	(13.4)	−	−	備前Ⅳ期　波状文の時期	218.959 235.500	208.417 196.437	158.772 158.012
	109	壺	1532	d·6	sf5	(18.0)	−	−	備前Ⅴ期	235.524	196.144	158.879
	110	壺	706	e·7	sf1	(16.1)	−	−	備前 肩部－青海波状タタキ	221.629	203.697	159.031
	111	徳利	53 43 51	g·7 g·7 g·7	sf2	(5.6)	(9.8)	−	備前 肩部－青海波状タタキ	208.372 208.335 208.448	209.276 209.471 209.377	159.161 159.211 159.134

表4　出土遺物観察表④

番号	取上げ番号	遺構	x 座標	y 座標	z 座標
非掲載破片					
92-3	570-7	sf 1	221.736	202.076	159.038
	577	sf 1	221.374	202.223	158.433
	793	sf 5	224.293	200.718	159.099
	1465	sf 1	220.368	205.946	158.629
	1564	sf 5	234.167	197.002	158.91
	2407	sf 6	236.288	199.757	159.273
92-10	570-9	sf 1			
	570-10	sf 1			
	753	sf 5	223.604	200.737	159.168
92-11	207	sf 2	213.717	210.411	159.1
	1574	sf 5	233.43	197.408	158.873
92-12	1029	sf 1	219.909	206.825	158.588
92-13	535	sf 5	222.908	200.159	159.291
	570-1	sf 1			
	570-12	sf 1			
92-14	570-14	sf 1			
	1462	sf 1	220.411	205.583	158.698
	1472	sf 1	219.924	206.566	158.699
	1686	sf 1	220.243	205.378	158.641
	2686	sf 1	219.917	205.353	158.435
92-15	347	sf 1	219.034	208.779	158.228
92-16	1011	sf 1	220.134	207.02	158.645
92-17	570-8				
	970	sf 1	220.93	205.652	158.943
92-18	940	sf 1	218.513	210.085	158.129
	979	sf 1	220.769	206.163	158.805
92-19	1013	sf 1	220.38	206.374	158.655
92-20	1003	sf 1	220.077	206.295	158.631
92-21	1463	sf 1	220.368	205.561	158.698
	1698				
92-22	649	sf 1	219.438	204.216	158.845
92-23	890	sf 5	228.731	201.183	159.297
99-24	1459	sf 1	220.116	205.846	158.701

番号	取上げ番号	遺構	x 座標	y 座標	z 座標
92-1	336	sf 1	219.137	207.03	158.694
	712	sf 5	222.906	201.374	158.9
	965	sf 1	220.606	205.575	158.773
92-2	699	sf 1	221.743	202.012	159.03
	1464	sf 1	220.368	205.867	158.669
	1710	sf 1	220.046	205.648	158.517
	2355	sf 6	234.365	207.698	159.349
	2679	sf 2	214.972	209.707	158.98
92-4	165	sf 2	213.494	211.234	159.058
	1458	sf 1	219.974	205.846	158.657
	1460	sf 1	220.116	205.678	158.696
	2748	sf 1	218.736	214.109	157.387
92-5	536	sf 5	223.354	202.063	159.267
	570-5	sf 1	221.736	202.076	159.038
	600	sf 1	220.24	201.794	158.73
	611	sf 1	219.203	203.552	159.111
	1461	sf 1	220.247	205.562	158.734
	1706	sf 1	220.22	205.708	158.618
	SF1埋土中				
92-6	1463		220.448	205.561	158.698
	1698		219.906	206.486	158.598
92-7	1013		220.38	206.374	158.655
92-8	1472	sf 1	219.924	206.566	158.699
	1642	sf 5	236.804	196.812	159.118
	4523	kuru 1	219.163	207.525	158.42
92-9	570-6	sf 1	221.736	202.076	159.038
	2765	sf 1	218.367	216.464	157.993
	2769	sf 1	217.97	216.767	157.659
	2770	sf 1	218.111	217.146	157.823

第23図　掲載遺物分布図

図版番号	番号	器　種	取上げ番号	グリッド	遺構層位	法量（cm）（反転復元）			備　　考	X座標	Y座標	Z値
						口径	底径	器高				
第20図	112	瓶			sf1	(7.6)	−	−	備前112と113は同一個体			
	113	瓶			sf5	−	4.2	−	備前			
	114	小鉢				−	−	−	備前			
	115	平水指	1149	e·7	sf4	−	−	−	備前	229.119	207.216	159.139
	116	小鉢			sf5	−	−	−	備前			
	117	山茶碗	66	g·8	sf2	(4.9)	(4.0)	2.6	備前Ⅴ期	208.718	211.355	158.551
	118	壺	1559	d·6	sf5	−	−	−	備前　窯印？	233.905	196.687	158.831
	119	天目碗	1684	f·8	sf2	10.8	4.0	6.3	瀬戸美濃　内反り高台 高台周辺には錆釉の化粧掛け 高台周辺を除き鉄釉 16ｃ後半	212.200	210.112	158.873
	120	擂鉢	1040	e·7	sf1	(28.8)	(12.0)	13.6～13.8	備前ⅤＡ期	220.296	209.846	158.02
	121	擂鉢	2283 2775	d·8 f·8	sf6 sf1	−	−	8.25	備前Ⅴ期	231.268 218.914	213.337 218.364	159.258 157.755
	122	擂鉢	67	g·8	sf2	−	−	−	備前ⅤＢ期 口縁外面に櫛目あり	208.522	211.994	159.122
	123	擂鉢			sf1	−	−	−	備前ⅤＢ期			
	124	擂鉢	363	f·7	sf1	−	−	−	備前ⅤＢ期	218.470	209.230	158.529
	125	擂鉢	1186	h·6		−	−	−	備前ⅣＢ期	196.878	198.186	159.239
	126	擂鉢	72	g·8	sf2	−	−	−	備前ⅤＢ期	209.588	212.196	159.15
	127	擂鉢	945	f·7	sf1	−	−	−	備前ⅤＢ期	218.511	209.326	158.123
	128	擂鉢	2007	d·9		−	−	−	備前ⅣＢ期	230.005	224.960	159.252
第21図	129	天目碗	1682	d·6		11.4	4.5	5.7～6.2	唐津	234.493	193.905	159.311
	130	甕	4534	d·6		−	−	−	口唇部に貝目痕有	239.321	187.741	159.315
	131	甕	4542	d·6	sf5	(25.2)	−	−	口唇部に貝目痕有	239.287	193.036	159.252
	132	擂鉢	1221	g·6		−	−	−		206.32	192.445	159.223
	133	高坏	2210	e·8	sf6	−	(22.0)	−		223.621	212.781	158.693
	134	ミニチュア	889	e·7	sf5	4.5～4.7	−	2.9	手づくね	227.851	201.146	159.093
第22図	135	炮烙	1819 1849 1850 1851 1856 1876	f·8 f·7 f·7 f·7 f·7 f·7	sf2	(21.8)	−	−	土師質 茶道具（灰器） 体部外面下部タタキ	216.041 211.348 211.510 211.675 211.844 212.326	212.159 209.833 209.758 209.821 209.665 209.620	158.483 158.507 158.524 158.512 158.766 158.546
	136	瓦			sf1	−	−	−	丸瓦			
	137	擂鉢	1782	g·8	sf2	(30.4)	(14.6)	(11.4)	瓦質	200.457	212.839	158.166
	138	擂鉢	2677	g·8	sf2	−	−	−	瓦質	206.929	211.096	158.744
	139	火鉢	489 491 1679	f·7 f·7 d·6	sf1 sf5	(内-24.0) (外-27.6)	(21.0)	7.3	印花文 脚付	216.717 216.957 231.284	202.264 202.575 197.989	159.151 159.080 158.984
	140	坏				−	(8.0)	−	底部－糸切り			
	141	小皿	1087	e·8	sf1	7.5	5.0	1.7	底部－糸切り	220.688	210.032	158.536
	142	小皿	991 994	e·7 e·7	sf1	10.75	6.0～6.3	2.75～3.1	底部－糸切り 板状圧痕	220.585 220.401	206.383 206.310	158.830 158.773
	143	坏	1787-1	g·8	sf2	11.7	7.6	2.7	底部－糸切り 板状圧痕	203.658	212.373	158.648
	144	小皿	57	g·7	sf2	6.0～6.3	5.0	2.4～2.6	底部－糸切り 見込み墨書	208.498	209.165	159.136
	145	小皿	1708	e·7	sf1	7.8	5.0	1.55～1.65	底部－糸切り 見込みに４ヶ所穿孔	220.285	205.191	158.537

表５　出土遺物観察表⑤

4．小結

今回の調査範囲は曲輪北側を中心に池之上城跡全体の1／2程度、調査成果は道路遺構のみ完掘し、それ以外の遺構は道路遺構検出面で調査を終了している。

虎口から続く道路遺構は切り合い関係等により3時期程度に区分変遷できる。1期（築城期）は道路2・4と3（SF2・4と3）、2期目は道路1・5と8（SF1・5と8）、3期目は道路6（SF6）の時期である。I期の道路2・4の土層断面図をみると、南からSP01、02、03では基本的には溝底ないし直上（初期段階）が硬化している。北側虎口付近とSF06ではSP06・05および08・07では道路当初の溝底と断面中位で硬化した部位が認められ、2時期にわたり使用され、またSF5のSP04では溝底と直上層が道路幅員分硬化していることから、継続的に長期間使用されたことがうかがえる。これら道路遺構に対応する各虎口の使用については南側の虎口（南虎口）が1期から、北側の虎口（北虎口）が2期および3期で使用されていたと思われる。16世紀前半から17世紀前半の一国一城令まで、八代忠相の築城から十二代忠能が領主館へ退くまでのおおよそ1世紀のなかで、築城時を含め3回の屋敷割りが行われたことになる。なお、軽石製の石積遺構については中之城跡や主郭部跡の調査でも出土し、土留めや区割り用に用いられたと思われる。

次に、遺物は15世紀以降のものが大半である。主なものをみると、出土数が少ない褐釉陶器はSF1から南に限定される。鉄釉龍貼付文陶器壺は褐釉陶器（93・94）と共伴し、SF1（ef・7）を中心に広範囲に出土する。池之上城跡から出土した舶載陶磁器は主郭部調査を超えるものはないが、褐釉陶器は平成19年度調査の中尾口南の八幡城遺跡からも出土し城域外に広がる。舶載陶磁器については、博多経由でもたらされたと思われるが、中国南部や東南アジア（タイ・ベトナム）産については琉球経由、16世紀後半以降では内の浦の存在も考慮しなければならない。また、出土例が少ない鉄釉龍貼付文壺は小片ではあるが松原地区第Ⅲ遺跡（郡元町）からも出土し、近接の祝吉遺跡（祝吉町）1次調査出土の緑釉陰刻牡丹文水注（軟陶 15世紀末南中国産）などを含め都城との関係を今後検討する必要がある。 またSF1やSF2などの道路遺構からの出土遺物は道路としての用途を失ったのちの屋敷地からの出土と解すべきと思われる。また、近世初頭（最終段階：3期）の陶器片や銭貨も散在する。土師器については6点掲載し、そのうち3点（141・142・145）がSF1、2点（143・144）はSF2からである。前者は鉄龍釉貼付を主体としたSF1（e・f7）付近、後者は褐釉陶器（97）を中心としたSF2（f・g8）付近で両者とも16世紀後半ほどに編年できる。

最後になりますが、掲載した遺物の評価については著者の認識不足は否めず、今後も調査成果の深化を図る必要があります。機会がありましたらご教示いただきたいと思います。

＜主な参考文献＞

都城市史 通史編 中世近世

『インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器』大橋康二・坂井隆 「国立歴史民俗博物館研究報告」 第82集 1999

『博多87』「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第758集 2004

『(3)中世後期の貿易陶磁器』續伸一郎「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編

『中世陶器の物流－備前焼を中心として－』伊藤晃ほか 2004年度広島大会 研究発表会資料集 日本考古学協会

『堺環濠都市遺跡（SKT929）発掘調査概要報告』「堺市埋蔵文化財調査概要報告書」第117冊 2008・3

『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 －SKT874－ －SKT900－』「堺市埋蔵文化財調査概要報告」第109冊 2005・10

『天界寺(II)』「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書」第8集 2002・3

『祝吉遺跡』「都城市文化財調査報告書」第1集 1981

『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』「都城市文化財調査報告書」第7集 1989・3

『平成2年度 遺跡発掘調査概報 都之城跡（主郭部）』「都城市文化財調査報告書」第13集 1991・3

『八幡城遺跡』「都城市文化財調査報告書」第91集 2009

写真図版 2

SF2

虎口

写真図版 4

1

2

4

18

19

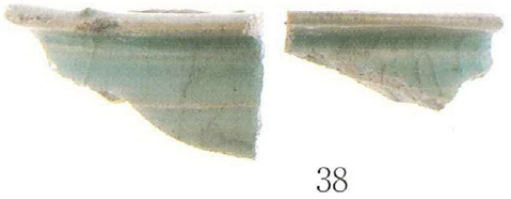
20

21

22

23

29


38

42

28

40

26

34

37

41

119

129

120

146